タランチュラをペットにいかが？　八幡明彦

これは、随分前に書いた初心者向けの私の経験談です(最終更新 1998 年頃)。学名等、変更されて訂正を要する箇所もあります。

飼育心得については、

爬虫類両生類飼育専門誌「ＳＣＡＬＥ」(現在休刊) 007～011 号 (1999 夏～2001 年夏)「蟲[2]大行進」のコーナーに連載があり、初回「 クモとつきあう 8 つの楽しみ方」は品切れにつき、当サイトで新規画像を加えて公開することにしました。

また、飼育方法の詳細については、ケアガイドを新たに作成しましたので、そちらも参照してください。

・脱皮の感動
＞脱皮日記　　・ゴキブリの与えすぎにご注意！！
・キングバブーンの怪我　・樹上性・俊足のトーゴ・スターバーストのケージをどうするか
・脱走第一号(チリアン・コモン)　・脱走第二号(インドネシア産不明種)
・タランチュラを安全に移動させる名案は？　・ハンドリングについて
・パワーフィーディング(過剰給餌)

＞ビギナーのためのタランチュラたち
＞アジア・アフリカ産か、ラテンアメリカ産か、それが問題だ。
・謎の商品名あれこれ　・購入・飼育についての参考 Link　・個人輸入についての参考 Link
トップページに戻る

みるかし姫の ／≧^∩^≦＼ 飼育日記（１）　八幡明彦

・脱皮の感動

脱皮の瞬間というのは、タランチュラを飼っていて、一番感動的な経験の 一つといえるでしょう。うちの香奈ちゃん (チリアン・コモン *Phrixotrichus spatulata*) が 96 年 11 月に脱皮したとき、私は本当に感動の嵐に包まれました。夜も 10 時ごろ、いつもよりも丁寧なシルク網をはった彼女は、裏返しになって脚の屈伸運動をはじめました。これが脱皮の始まりと知っていた私はドキドキしながら見守ったのですが、知らなければ「あれ、しんじゃったの？」と不安になるところです。普通、タランチュラは脱皮前に長期の絶食をしますから、なおさら不安になるのです。

脱皮が始まり二時間ほどすると、背中が割れて、新しい体が出てきました。靴下を脱ぐように脚を引き抜く様は、とても神秘的なものがあります。何だか二匹のクモが絡み合っているようにも見えて、脱皮というより、「分身の術」に見えるのです。
脱皮したてのタランチュラは、まだ牙が白く、全身の毛が新たになってピカピカに輝いています。脱皮中と直後のクモはとても無防備なので、ケージ内に食べなかった餌のコオロギなどがウロウロしていてはいけません。静かに静かに、見守ってやります。
そして、クモが元気に動き回るようになったら、脱皮がらはとりだします。これは、種や雌雄を鑑定する材料にもなります。なお、樹上性種は、シルク網の隠れ家のなかで脱皮するので、あまり劇的ではありません。ツマベニちゃん（*Avicularia sp.*）の場合は「いつのまにか、二匹になっちゃった」という感じでした。
美しい脱皮の連続写真は、 *Tarantula Manual* のＨＰへどうぞ！！

・ゴキブリの与えすぎにご注意！！

うちのクモの初めての事故は、ゴキブリの与えすぎによる突然死でした。1990 年頃です。私が初めて飼ったタランチュラは、米国シアトルで購入した金ぴかのチリアン・フレーム成体でした。東京のちいさなアパートでゴキブリホイホイにかかるチャバネゴキブリを、ピンセットでつまんではちょくちょく餌にやっていました。数ヶ月後、「ローズ」ちゃんは原因不明の突然死をとげました。（ちなみに彼女は、標本になって、今も我が家をみまもってくれてます。）
不審に思った私は、数年後、英文メーリングリスト上で尋ねてみたところ、「家ゴキブリは決して与えてはいけない!」「私もそれで殺しました」「私は野生のコオロギ・ガも農薬が怖いから与えない」などなど、返事がきました。
クモのからだの構造は昆虫よりも原始的ですから、殺虫剤に対してより影響を受けやすいということは確かです。私のタランチュラ第一号・ローズへの追悼の意を込めて、訴えます。

＜＜＜タランチュラに家ゴキブリを与えるのは危険です!!＞＞＞

・キングバブーンの怪我

「マルコム」は、香港奇珍屋で買った、もういい大人のキング・バブーン （*Citharischius crawshayi*）です。脚が太くて全身ベルベットのようなつやのある美しい 赤茶色の大型タランチュラです。その魅力については、 タランチュラ・フォーラムでのやりとりをご参照。
奇珍屋でプラスチック・ケースを手にしたとたん、私に向かって前脚を振り上げ、シャーッ、シャーッと威嚇音を発し（これは、触肢と第一脚の付け根を擦りあわせる音です）、牙をむく過激なパフォーマンスに、思わず衝動買いしてしまいました（香港の価格では１万円）。

その「マルコム」が 97 年 10 月のある日、右の第4脚から出血（緑の血）していたのです。 ちょくちょく、プラスチックの壁をよじ登っていたので（タランチュラの特徴は 脚の先にある吸着性の毛束で、大きな体してツルツルのガラス壁も平気で登るのは驚きです）、どうやら墜落した際に怪我したようです。
どくどく大量出血という感じではないのですが、あわてて、応急処置を調べ、コーンスターチを傷口にふりかけて止血を試みました。一晩たって、また出血していたので、さらにコーンスターチで傷を固め、砂糖菓子のコーティングのような状態にして、様子を見ました。
ケージはよじ登れないように、床材を厚くして天井が低くなるようにしました。出血で水分を失うので、その後も水容器の水もきらさぬようにして様子を見たところ、マルコムは、足をひきずったままではありますが、立ち直ったようです。
英文メーリングリストの人々によると、傷からの感染の危険があるので、クモ自身が自ら脚を切断する場合もあるそうです。その際は間接からぽろりと取れてしまいます（そして数回の脱皮で再生します）。人工的にこの過程を行う手術も可能ですが、それを試みて失敗し、逆に出血多量で殺してしまった人もいます。生兵法けがのもと。止血が第一、それでもどうしても止まらない際にだけ手術しましょう。
教訓。大きな徘徊性・地中性タランチュラは天井の高いケージ環境に入れないこと。

=========< /≧^∩^≦＼ >==========

そして数ヶ月後、クリスマス前になって気づきました。なんと、マルコムの右第4脚は完全に根元から「無くなって」いるではないですか？確かに先週まであったはずなのに。ケージの中を探してみても取れた脚は見つかりません。埋めちゃったのか、はたまた、食べちゃったのか?!

キングバブーンの脚が＜消えた＞！？というミステリー。

・誰か、いい娘、紹介してください（ピンクトーの一種オス成体がいます）

香港の「奇珍屋」で購入したピンクトーの一種(ツマベニちゃん)ですが、97年9月、脱皮をしてオスであることが判明しました。触肢の先(交尾器)が丸く膨らんで、第一脚に鍵爪(これでメスの第一脚をしっかり「抱く」のです）もしっかり生えています。 オス・メスを交尾のために「お見合い」させる際の通常のルールは、オスの方を送るということですから、どなたかこの息子を「もらって」くださる方おられませんか?
一つの難点は、彼の種名がまだ特定できてないこと。香港の常で、いいかげんな中国名（巨大粉爪雀食蜘蛛）で安く売られていました。*Avicularia* であることは間違いないのですが、うっかりして脱皮がらを保存しておくのを忘れました(脱皮がらから 種を特定することは専門家には可能です)。
日本でもよくでまわっているいわゆる「ピンク・トー」 *Avicularia avicularia* ではないようです。
ご関心のおありの方は、 こちらの掲示板まで。

後記:
その後、大阪の「レガリス」さんから、繁殖のためのペアリングの申し出があり、ツマベニを郵送しました。

その他の種も含めて、ブリーディング（繁殖）をまっている個体については、→ 繁殖まちの個体たちページへ　飼育日記(2)へ

みるかし姫の ／≧^∩^≦＼ 飼育日記（２）　八幡明彦

･樹上性･俊足のトーゴ･スターバーストのケージをどうするか

地中性･徘徊性のタランチュラは、適当な広さのケージに適当な厚さの適当な床材をひけばよい（というのも結構選択がむずかしいんですが）わけですが、樹上性の種となると、いかに「樹上」的な環境を作るかという問題があります。ピンクトーならまだしも、もっと活動的な種になると、三次元の動きをしますから、上部のフタをあけた際に逃げ出す、という怖れもあるわけです。

わたしが初めて購入した俊足の樹上性種は、タランチュラの韋駄天というべき トーゴ･スターバースト（*Heteroscodra maculata*：左）です。これが チューブ状の巣から飛び出して走り出したら、ものすごいスピードです。コオロギを獲る速さは目にもとまりません。

さて、こういう連中を飼うのにどういうケージにいれたらよいでしょう。こ いつらは、逃げるとき上へ上へと走り上がる習性がありますので、上部の開く ケージでは、あなたの腕を駆け上がって首筋へ一直線、ということになりかねません（彼女らが、あなたのうなじに熱いキスをするかどうかは、運しだい ／≧^W^;≦＼ ）。

そこで、わたしは、密封性ふたに留め金がかかるキッチン用のプラスチック容器の背の高いのを買い、これを上下逆さに（ここがミソ）してみました。もちろん、クモをいれるまえに必要な空気穴を開けておき（わたしは熱した五寸クギをつかいます）、空気穴に針金をとおして、止まり木を容器のほうに（蓋でないほうに）固定します。こうすると、ふたをあけた際に容器のほうにある「環境」（クモの巣と 止まり木）を撹乱しなくてすむだろうという寸法です。逆さになった蓋の部分 に水容器を置き、最後にクモを導入します。

果たして、私の「アナンシ」ちゃんは、このケージの中にシルク網を張りめぐらしましたが、蓋を（下から）開けた際には、上部のかくれがに駆け上がり、下に降りてくることはありません。私は、ゆうゆうと蓋部においた水容器を替えたり、落ちているコオロギの食べカスを箸で取り除いたりできる、というわけです。

この容器は留め金で蓋が固定されるので、万一ケージが倒れた際も蓋が開いて逃げられるという心配がありません。「安心感」は、潜在的に危険なクモを 飼う際に家族の合意を得る最低条件でもありますので。。。

→ さらに色んなタランチュラ･ケージの工夫はこちらのページへ

・脱走第一号(チリアン・コモン)

96 年の 6 月のことです。タイで買って帰ったばかりのチリアン・コモンがガラスケースのちいさな空気穴(直径 3、4 センチの半円形)から抜け出しました。(脚を除いた)体長が 8 センチにもなる成体なので、まさかこの穴はぬけられないだろうと、たかをくくっていたのですが、どうやってすりぬけたのか、ケースのなかから消えていました。
香港に家族が移ってきた直後のことで、ここで家族をパニックに陥れては 大変(将来、クモが飼えなくなる!)と、だまって部屋中を探し回りました。はたして香奈ちゃんは、部屋の隅、窓の溝のなかに身を沈めておりました。部屋の端から端まで歩いてきたことになります。
まあ、ハンドリングが可能なチリ・コモだったからよかった。それでも、外に逃げ出したら、50 人の警官隊が出動する、というのが、日本の実状ですが。

・脱走第二号(インドネシア産不明種)

次は、97 年 12 月のことです。今度は、岡山のスコープで買ったインドネシア産の茶色の不明種(のちに *Coremiocnemis sp.*と判明) 「パクパハン」が、逃げ出しました。普段あまり動き回らないので、油断して、ケースのふたを開けたまま、ちょっとつついてやったのが間違いでした。
一瞬の出来事。パクパハンは、ケースから飛び出して、床を疾走しはじめたのです。その早いこと。あわてて、手にしたケースのふたで捕まえました。床に何も置いてなくて、何かの陰に逃げ込まなかったのが幸い。二度と捕まえられなくなる前の数秒の間に、逃走をふせぎました。あなどるまじ、アジア産の「大地の虎」たち。

・タランチュラを安全に移動させる名案は？

タランチュラをケージ外に取り出さねばならない場合(ケージの掃除、ケージのサイズ替えなど)、種によっては、そのすばやい動きや凶暴な性格から、命の縮む思いをすることが少なくありません(かまれそうになるとか、逃げられそうになるとか)。飼育者がびっくりしてクモを床に落としでもしたら、タランチュラ自身にとっても、致命傷となりかねません(タランチュラの 腹部はとても柔らかいので、転落によって破裂することは容易です)。なにか、(両者にとって)「安全」な移動方法はないでしょうか。
私は、ビニール袋を用いる方法をつかっています。台所用品屋にいくと、商品名ジップロック(Ziplock)という、ふたが簡易ジッパーで閉まる厚手のビニール袋を売っています。適当なサイズのものを使って、クモを容器から容器へと移す「のりもの」とします。必ず「厚手」のにしてください。
◆まず、ケージの開口部、ないしフタを取ったケージ全体が袋の口に入るようにします。この際、袋のサイズを適当に選び、必要ならビニールテープで固定するようにします。
◆それから、箸を使うか、息を吹き込むか、何らかの方法でクモをケージ開口部から外へ出るように仕向けます。この段階は、一番逃亡の危険を伴うので、まず、なによりもクモの習性(どんな走りかたをするか、上

へか、横へか、箸に向かってか、箸から逃げる方向か、など)を知っておくことが大切です。初めて買ったクモを小プラケやデリカップから取り出す際には、容器ごとジップロックに入れて袋の口を閉じてしまうことを、お勧めします。これなら、クモの予想のつかぬ動きにも、逃げられるおそれはありません。動きの遅いクモ なら、ただ上から袋をかぶせてしまえばいいでしょう。

◆クモをビニール袋内に追い込んだら、袋の口が絶対はずれないように注意しながら、クモを袋の隅角に「おいやり」ます。ビニール袋の得点は、こうした過程をすべて目で追いながらできるということです。クモを決して視界の「死角」においてはいけません。攻撃的なクモ(バブーンなど)はこの時威嚇音を出して抵抗するものもありますが、上下にビニールに挟まれた姿勢では牙を用いることもできません。

◆さて、クモを袋の隅に追い込んだら袋を折り曲げて、クモの移動の自由を奪い、袋の口のジッパーをしっかり閉じます。これでクモを安全に次の容器まで運ぶ準備ができました。袋はなるべく「ペチャンコ」な状態にして、クモの移動の自由を奪ったままにしておくのがよいでしょう。

◆移動先のケージの開口部にジップロックの口を差し込みます。この際、なるべく奥まで差し込んで、クモが這い出すときに、直接ケージの底に移るように仕向けるのがコツです。◆と同様に、クモがどのように走り出るかを予想することが手助けになります。

◆クモをビニールの外から袋の開口部へと押しやります。あわてて押しつぶさないこと。ケージとその開口部が大きければ、袋の「底」部分をのこして、全体を中に挿入してしまい、フタを半分閉めながら、袋の底を引っ張って引き抜く方法もあります。クモは自動的にケージの中に飛び込み、逆戻りはできない、というわけです。この段階であせってはいけません。特に上に登ろうとするクモを無理に下に追いやろうとする際、クモをあまり刺激するとビニールを噛む種もあるかもしれません。私の成体コバルト・ブルーは牙でビニールを貫いてしまいましたが、クモが動けなくなるだけで、ビニールが裂けることはありませんでした。ただし、手を噛まれたら大変なので、くれぐれも、ビニールの上からでもクモには直接触れないように(特に前面からは絶対ダメ)しましょう。(こうなってくると、「安全な方法」って感じじゃないかな、もう。そう思う人は 凶暴なコバルト・ブルーなんかを飼うのはヤメにしておきましょう。)

残念ながら、文章で説明しても、お分かりになり難いかも知れませんね。以上の方法で、私は、大型のバブーンも、俊足のトーゴスターバーストも、凶暴なコバルトブルーも、安心して取り扱っています。いずれにせよ、いかなる方法を取るにせよ、いくつかの原則を忘れないようにしましょう。

・クモの逃げ場を限られたものにすること(まず、ジップロック内、それも突破したら、トイレなどの密室内が第二次予防線)	・すべての過程を慎重に、かつ自信をもって、行うこと。(愛情もお忘れなく、彼女らはあなたの敵ではありません)。
・万が一、逃げ出した際に、すばやく捕まえるための容器(上からかぶせるデリカップなど)を手元におくこと。	・噛まれる怖れがあると思う際は、手袋などをして、自信をもつこと(ただし滑りやすい軍手は厳禁)。

標語:事故は恐怖心から。あなたのペットを 恐怖ではなく、尊敬を持って扱おう。

・ハンドリングについて

タランチュラのハンドリングは、初心者にはお勧めできません！
また、決してハンドリングを考えてはならない種類のタランチュラも多い(噛み付いたり、いきなり走り出して逃げていってしまったり、あなたの手から落ちて死んでしまったりするかも...)ということを知ってください。

タランチュラの種とその性質を熟知していない人が、安易にハンドリングを試みてはなりません。

そして、絶対にこういうこと(タランチュラを顔に近づける)をしてはいけません！！

タランチュラの中には（特に米州産のもの）、腹部の毛をとばして、それが皮膚につくと、とてつもなくカユくなったりする人もいます。また、目や鼻腔、気管支に入ると、炎症を起こしてしまうこともあり得ます。 タランチュラは、あくまで距離を置いてつきあう相手、と心得ましょう。

みるかし姫の ／≧^∩^≦＼ 飼育日記（３）　八幡明彦

・パワーフィーディング(過剰給餌)

米国のタランチュラディーラー、トッド･ギアハート氏によると、餌を過剰に与えることで、タランチュラを早く、大きくすることができるということです。特に幼体の際に、ピンヘッド(コオロギ一齢幼虫)やちぎったコオロギ(頭をつぶして攻撃能力をうばうとか)を与え、それを食べている最中にさらにもう一匹与えて、食べなくなるまで与え続ける、といった方法で常に満腹にさせます。そうすると、脱皮の間隔が短くなり、早く大きくなるそうです。
成体になると、おのずから食欲もコントロールされ、餌をやりすぎてもどうせ食べなくなります。パワーフィーディングによって最終的にサイズが大きくなるかどうか（もちろん、飢えた個体はフルサイズには大きくならないでしょう）、あるいは「寿命」が縮まるかどうか、は定かではありません。
腹部が満腹で重たくなることのデメリットは、(英文メーリング･リストでの 議論によれば、)成体になった際のケージ壁からの転落事故です。これを防ぐには天井を低くしておく工夫が要るでしょう。また、種によっては、床材がアラすぎると、腹部下部をこすって腫瘍状の突起を生じる障害も知られています（これは死に至るそうです）。
幼体の期間が早く過ぎないかなあ、と待ちどおしい向きは、パワーフィーディング、お試しになっては？ 私自身は、パワーフィーディング傾向がありますが (食うだけ与える)、成長速度については、まだ比較実験をしてないので、なんとも申し上げられません。ただ、私の飼っているなかでは、樹上性種の方が食い放題食って、さっさと脱皮するという印象があります。（脱皮日記も参照）

その後、わたしはタランチュラ幼体へのパワーフィーディング＝大量給餌を続け、 同じ卵のうから生まれた仔が余り食べさせない個体よりも急速に大きくなった例 をいくつも見ている。♀の場合には「早く大きくなったら早死に」という結果を特に得ていない。最大サイズについても、食べさせなかった個体に、後に急速に食べさせることで「追いついた」例もある。今まで大量給餌によると判断できる弊害を見たことがない。「過剰給餌」は言葉がマイナスイメージで良くない訳かもしれない。

種によって、パワーフィーディングが「効く」種類と効かない種類がいる（たとえば Lasiodora 属、Pamphobeteus 属のほとんど、Hysterocrates 属では gigas はそうだが scepticus は違う、Grammsotola 属でも rosea には効かないが aureostriata には効く、など)ようだと言うことも判明。

謎の商品名あれこれ

・「タイガー・ブルー」(中国名「老虎尾藍蜘蛛」)

いつも売り名に泣かされる香港のペット通り・通菜街の「奇珍屋」。正体不明の腹部に虎ジマ模様の地中性タランチュラの幼体が 「タイガーブルー」の名で売られていました。その習性は、コバルト・ブルーのよ うに、トンネルを掘りまくっています。店の兄ちゃんは、「いや、コバルトブルー とは違うんだ」と言い張りますが。。。（でも、後日、正真正銘のコバルトブルー の亜成体が「金属藍 Metallic Blue」の名で売られていた！ あきれた） 店のなじ みの客の話では、これはタイ・タイガー(*Cyriopagopus paganus*)幼体だとも。

・中国名「重金属」

もう一つの謎の名。英語名 "Metallic Gold"。でも、この中国名なら「ヘビメタ」 だわな。おとなしいやつと思ったら、ただ元気をなくしてただけで、実は前足を ふりあげて威嚇もしてみたり。米国でもその正体について論議が 繰り広げられた「ペルビアン・ブロンド」か、と推察された(*Lasiodorides polycuspulatus* に落ち着いたたのかな、結局)が、脱皮がらをリック・ウェスト氏に鑑定していただいたところ *Cyrtopholis sp* のオス亜成体とのこと。

・「クロ」

これは、究極のいいかげんな命名。犬じゃないんだから。タイ・バンコック青空市場のヌンの店。おそらくタイランド・ブラックか、タイランド・エディブルと思われる、野生個体。リックの鑑定では、*Cyriopagopus paganus?*（ただし、彼の意見では、*Haplopelma* と *Cyriopagopus* は同属に含めるべき、とのこと）

2002.1.後記： その後の同定により、C.paganus として流通していた「ベトナム・タイガー」の通名も付いた上記のものは、*Haplopelma longipedum* と判明。

・鑑定を頼みたいときは？

ポピュラーな種であれば、鮮明な写真をスキャンしてＨＰ上で見てもらうなどで、 ディーラーや専門家の判断を仰ぐのが手っ取り早い方法です。英文メーリングリス トに投稿すると、普通2、3種のうちのどれかだ、というような返事がかえってきま す。

科学的には、クモの種および雌雄の鑑定は、ある程度育った個体の 脱皮がらから、同定が可能(参考ページ)です。顕微鏡と知識があれば、雌雄の区別くらいは私たちにも可能なはず。でも、ずぼらな人と自分が専門家になる気の無い人は、別の専門家に頼みましょう。
私のうちのアナンシちゃんは、香港「奇珍屋」で「印度熱帯雨林花蜘蛛」の名で売られていたのですが、脱皮がらの鑑定をしてもらったところ、西アフリカ産のトーゴ・スターバースト(*Heteroscodra maculata*)のメスであることが判明しました。私がいつも鑑定を依頼するのはカナダのタランチュラ専門家リック・ウェストさんです。

購入・飼育についての参考 Link

タランチュラ飼育者のページ(日本語)		ケアガイド	種別データベース
Pets Pets!	「毒蟲の飼育・繁殖マニュアル」の著者・秋山さんの総合的ページ	○	○
八百鬼夜行	鶏冠さんのタランチュラ総合マニュアル	○	○
WHITE NOTE's rainbow	Carmine さんのページ。2001 年開始の新しいサイトです。	○	
Gene さん	かつて、アメリカ在住日本人でインターネット上の話題を盛り上げてくれた存在(更新されてないようです)	○	○
バズさん	インターネットの「しにせ」的ページ(更新されてないようです)	○	○
KEEPER'S NET PAGE	インターネット上の日本語フォーラムとして初めて対話の場を提供した shoda さんの歴史的サイト(Nifty を別にして)。過去の対話が読める。		○
でんぱたんちの愉快な家族の小屋	クモ以外にも無脊椎動物多し。		○
Venomous	トキタさんの詳細な飼育日記	○	
Villain terror	FE-Suzuki さんの飼育データ		○
A.L.F.	タランチュラ全般への入門的解説あり		○
シクラソマランドへようこそ	タランチュラ飼育種写真集あり		○
あ～す研究室	あ～す君の飼育データ		
Mysterious Restaurant	よしさんの飼育データ	○	
異形のものたちへ	鼈の化石さんの飼育マニュアル	○	
誰でも飼える蛇講座	まるぴんさんの飼育データ		

タランチュラ販売のページ(別にみるかし姫が「推薦」するわけではありません。自分で判断してください。)		リスト
スコープ	岡山の卸・通販ショップ。タランチュラの老舗。(飼育ガイド	○

	もあり。)	
ペポニ	名古屋のショップ	不更新
レインフォレスト	東京店･大阪店	大阪･東京
Kingdom GREEN	九州の通販ショップ	○
Koga Reptiles	東京の通販ショップ	○
Fennec REPTILEs	静岡の通販ショップ	○
JUNGLE HOUSE LIZARD'S	北海道のショップ	○
ワイルドモンスター	茨城の通販ショップ	○
ペットショップバーデン	東京葛飾のショップ	○
R-vision	静岡の通販ショップ	○

ブリーダー自身の販売サイト(これらは、断固推薦です。)		リスト
タランチュラ･ブリーディングハウス みるかし姫の館	since 2000.4～　うちです、うち。	国内･輸入
Silver wing	トキタさん	gallery

海外の業者		リスト
Todd Gearheart	個人ブリーダー･輸出入商として 2001 より独立。	輸出リストはみるかし姫にメール問い合せのこと
Glades Herp	Florida　Todd が居たころ個人輸入で随分世話になりました。	List･New
West Coast Zoo.com	Florida　日本の卸も世話になっているところ。	Gallery･List
Spider Patch	米国内販売のみですが、以前別輸出業者経由で入手したこともあります。	Gallery･price
個人輸入のノウハウ	海外から個人輸入したい人向け。今井さんのページより	

外国語サイト Link

英文が理解めなくても、ローマ字が読めたら是非読んで欲しい情報サイト	
学名の変更･最新情報	Todd Gearheart のページより。これの日本語バージョンも作らなくっちゃね。
学名･通名･画像リスト	Rick West のページより。専門の研究者であるこの人のページの同定が一番 信頼性高いと思われる。サムネイル画像一覧はこちらから
学名･通名･画像リスト	米国タランチュラ協会のページより。♂♀に分かれていて見やすい画像リスト。
香港蜘蛛網	日本以外で珍しいアジア圏のサイト。中国繁体字フォントが必要だが、とりあえず画像が綺麗！

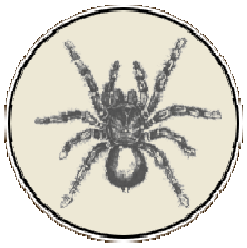
Best sites recomended:

Tarantula database: (Todd Gearheart, USA)

WWW.TARANTULASPIDERS.COM

Tarantula species database:

(Rick West, Canada) Brithish Tarantula Society American Tarantula Society

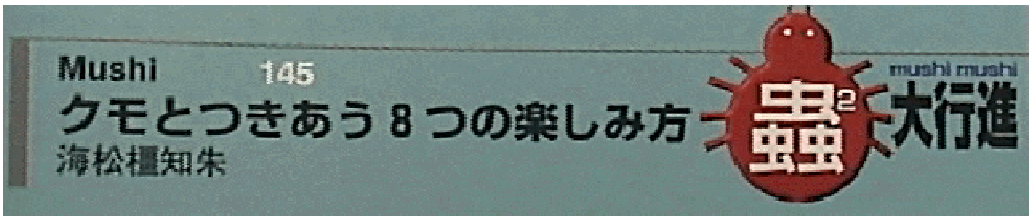


参考文献:

(日本文) 爬虫類両生類飼育専門誌「SCALE」(現在休刊)

007～011 号「蟲[2]大行進」のコーナー

初回「 クモとつきあう8つの楽しみ方」(1999.12)は、品切れにつき、当サイトで新規画像を加えて公開。必読のみるかしっくエッセイ！



出ました！　お勧め飼育本！

わが友人･秋山智隆さん著

「毒虫の飼育繁殖マニュアル」（データハウス刊　1800 円）

タイトルちょっと問題アリ(笑)ですが、内容豊富。写真提供など、いろいろ協力させてもらいました。皆な、買おう！東京なら、新宿紀伊国屋＆池袋ジュンク堂に平積みしてあるそうだ！　('01.10 月末現在)

タランチュラ･ケージの工夫、大公開！！

八幡明彦

いろいろな人から、タランチュラのケージをどのように設定したら良いか、とのご質問をいただきます。そこで、今回は、ケージの工夫について、みるかし姫の実践講座を、一挙公開いたします。（今回はケージ自体についての特集とし、床材他については、またの機会に）

1）地中性タランチュラ

タランチュラを飼ったはいいが、いつも土の中に潜っていて見えない。生きているか死んでいるかも分からなくて、面白くない、という声はしばしば聞きます。地中性タランチュラが、ケージの環境設定を気に入らず、壁に張り付いている、などというのよりは、潜っている方がよほど健康なのですが、せっかく買ったクモが全然見られない、というのも飼い主には残念な話です。 東南アジア産など種によっては、数ヶ月出てこない、なんて話もよくあります （真夜中にこっそり忍び寄ってみると、捕食のため地上に出てきていることもあるものですが）。色が美しいことで有名なコバルトブルーなどは、「どうしても 見たい」ということで、不用意に地下トンネルをつつきまわし、飛び出してきた ヤツにガブリ！なんて笑えぬ惨事にも。^_^;;

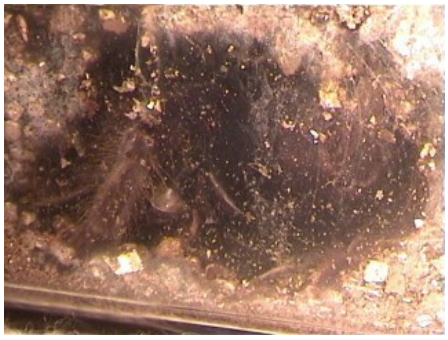
そういう種について、なんとか地中での様子が見えるようなケージの工夫をしてみよう、ということです。みるかし姫は、丸くく反った木の皮をトンネル状に土に埋め込み、その中にうまく巣を作ってくれるように、仕向けています。流木を半分土に埋め込んでおくと、その周りにトンネルを掘り、うまいこと透明壁に接した 部分から中が覗き込める、ということもあります。ただし、ふつう、地中性種は、トンネルを内側から糸で裏打ちするので、ときどき壁ぞいにピンセットを突っ込んで、この糸を取り払わないと、中を見ることは難しくなります。なかなか、こちらが思うように掘ってくれない場合は、再度構造物を設定し直して、クモを導入し直す、といったことになりますが、あまり調子の悪い個体に対してしばしば巣を壊すと、ストレスを与えることになりましょうから、クモの状態がよさそうなときに、レイアウト替えを試みて下さい。なお、地中性種はいずれも狂暴ぞろいですから、くれぐれもタランチュラのケージ間の移動にはご注意を。みるかし姫は、「ジップロック(TM)」を使った方法を用いています。

狂暴な地中性種・マレーシア・バードイーター(Coremiocemis.sp.) のケージ。木の皮のトンネル中に巣を作った。トンネル巣を作ると、 落ち着くようで、あまり飛び出してこなくなる。

壁に密接させた木の皮のトンネル内にいるコバルト・ブルー(Haplopelma lividum)。 この種は飛び出してくるとケージの天井まで一気に駆け上がるので、 蓋をあけるのは慎重にする。姿が見たいときは、蓋ごしに トンネル巣の入り口 に向けて水スプレーを浴びせると、飛び出してくる。

コルク・バークの下に潜っているコロンビア・ジャイアント(Aphonopelma robustum)。 この種は、神経質なところがあり、潜って隠れる場所が必要。湿度維持に も役立つ。

流木を埋めた床材の中に、サントメ･ジャイアント･オリーブブラウンバブーンが、地下トンネルを 作った。もともと、木の根元に地中～地上巣を作っている種らしく、ナチュラルな 設定となった。



透明ケージごしに、トンネル中のサントメ･ジャイアントが一部見えている。

2) 樹上性タランチュラ

樹上性タランチュラは、「タランチュラをペットにいかが」のページで、トーゴスターバーストのケージを例に紹介しました。立体的な動きをするので、ケージづくりにもいろいろな工夫ができるでしょう。市販（といっても特注か）のものでは、アクリル性の背の高いケージをショップなどで使っているのを見かけますね。下は、大阪のぺっとんで、生体(Poecilotheria rufilata)につけてケージ代サービスで譲ってもらったアクリル性特製ケージです。

左端に立てて固定してあるコルク皮とケージ壁の隙間にタランチュラが潜り込むので、 餌をやったり、ケージ内の水替えなどの際は、都合がよい。

右端の蓋はスライド式。

･･･とまあ、二重スライドになっている。

しかし、特注ケージは一般に高価で、しかもタランチュラのサイズが大きくなったらケージ替え、ということも必要になりますから、みるかし姫は、他の様々な容器を利用してケージを作っています。

まず、幼体･若体に使えるのは、ガラス太試験管、種々の透明プラスチック台所容器、輸送用に使っているデリカップの類です。プラスチック容器は、ポリエチレンならキリで空気穴を開けますが、硬質のばあいは割れてしまうので、熱した太い釘で穴を開けます。タランチュラは湿度が必要といっても、空気の流れが無いのは腐敗･かびなどのもとにもなりますから、空気穴は容器をぐるりと取り巻くくらいは開けます。ガラス試験管

の場合は、穴を開けられないので、蓋にしたスポンジをとって、日に一度は空気を入れ替え ましょう。幼体といえども、スポンジをかじって脱出する可能性もあるので、二重ケージにする、という手もあります。

樹上性種は、上下への動きをしますから、背の高い容器としては、スパゲティやマカロニを入れるパスタケースがお勧めです。うちで使っている四角いタイプは、蓋に留め金のかかる密封性のもので、安定性がよく、万一ケージが倒れても蓋が開かないので、狂暴な樹上性種も安心です。密封容器ですから、空気穴は 十分たくさん開けます。

蓋を下にしているのは、樹上性種は逃げるとき上へ逃げる、という私の経験上の教訓と、コオロギの死骸、クモのふんなどを掃除するのに便利だからです。上り木は、容器の蓋でない部分に針金などで固定し、蓋をあけても、巣が撹乱されないような工夫をすると、オーナメンタルスパイダーでもおとなしく、ケージの掃除をさせてくれます。

最後に、繁殖用の特別ケージを紹介します。
スリランカン・オーナメンタル用に用意したものです。プラスチック製の衣装ケースを縦長にし、手をいれられるサイズの四角い戸をプラスチックカッターで切って開けます。メスのシェルターとなる木の皮を針金で固定し、オスのケージもまるごとなかに入れて固定。衣装ケースのふたはしまりがゆるいですから、しっかり 針金で止めます。空気穴を各所に開けて、下にヤシ皮、みずごけ、水容器などを 置いて、できあがり。メスが新たな住居に馴れてきたら、オスケージのふたをあけて、両者の出会いを待つ、というわけです。

さあ、うまくいくかどうかは、「繁殖ページ」の方で。。。

タランチュラ飼育＆繁殖の基本10　　八幡明彦

タランチュラと一言で行っても、記載されているだけで 800 種以上、世界に出回る飼育用の個体は 100 種を越す。そのうち飼育下繁殖させられている種も、どんどん 増えているが、飼育と繁殖の基本は、あまり違わない。そこで、ここでは、飼育 および繁殖の初心者の皆さん向けに、ポイントをまとめてみる。あくまで「ポイ ント」集なので、これだけでタランチ

ュラ飼育の全てを知った気にならないよ うに(笑)。「地中専好種」「樹上専好種」など飼育環境別のグループについての注意点は、なるべく含めた。

種別の細かい留意事項や経験的知恵については、網羅は不可能なので、触れない。 繁殖となると、そうした細部が成否の決め手になる場合もあるだろうが、そこは 繁殖経験者に尋ねてみて欲しい。(2001.11 記 文責 みるかしちあき)

－ タランチュラの飼いかた 一般的原則 －

	幼体段階(体長 2cm 程度まで)	成長個体～成体段階(体長 2cm 以上)
1) 種の性質を知り、扱い方を心得る	タランチュラ幼体は、一般に孵化したてで体長 5～10 ミリ、脚を広げたレッグスパン 10～20 ミリ程度。体長 15 ミリ位までは、あまり噛まれることを怖れずに、素手でさえ扱えるデリケートで可愛らしいムシだ。反面、逃げ脚は速く、脱走されると追いまわすのに苦労する。日本に一般に棲むクモで練習するとよいが、マヨネーズ容器を半分に切った捕獲容器などで、クモを捕まえられる練習をしておくとよい。あるいは、ビビらなければ、そっと手の平に採って、かつ素早く筒型容器に追いこむということができる。いかなる場合も指でつまんだり、振り落としたりは禁物。クモが反撃して噛んだり、死んだりする。成長した大きな(性格の荒い種の)タランチュラの飼育にびびっている人は、幼体から始めて慣れていく訓練をすることをお勧めする。	体長 2 センチ以上に育ったタランチュラの性質は、種ごとに様々である。留意すべき点は、ケースの蓋を開けることや巣穴にピンセットをさし入れることへの一般的反応はどうか、ケースから出す際にどういう歩き方(ないし走り方)をする種か、という辺り。種への知識のある人に確実に聞いて、心の準備をしておく。ﾁｬｺｼﾞｬｲｱﾝﾄｺﾞｰﾙﾃﾞﾝｽﾄﾗｲﾌﾟﾆｰの著者が有する WC(野生捕獲)成体の様に手のひらに載せられるほど大人しい個体もいれば、蓋を開けただけで飛び出す勢いで走り回って牙をむくｺﾊﾞﾙﾄﾌﾞﾙｰのような種もいる。初心者には当然大人しい個体を勧める。ケースの掃除や移し変えなど、クモをケース外に出して扱う必要がいずれ生じるから、平場でクモにデリカップをポンと素早くかぶせ、蓋を下に差し入れて閉じ込めるという手法は、大人しい個体で練習しておく。攻撃的種の扱い方は、慣れればどうということはない(クモは飛びかかってはこないので、基本は攻撃範囲に自分の身を絶対にさらさない細心の配慮で必要十分)が、こればかりは経験を積むしかなく、文章で書き尽くせない。 【刺激毛による防御】 北～南アメリカ大陸産の種の多くは、腹部に刺激性の毛を持っており、コレに触れると、人によるがカユミ～かぶれ症状を呈することがある。これはアレルギー症状なので、長年飼っているうちに発症する場合もある。種によっては、第4脚で腹部を蹴って空気中に細かい刺激毛を飛ばすという技を用いるので、そうした種に顔を近づけてはならない。目鼻や喉に入ると、かなりの炎症を招くおそれがある。ケージごしにあなたが見つめただけで毛を飛ばしてくる、ということはないので、要はクモを直接刺激しない配慮があれば、被害は防げる。毛はケース内に落ちてもいるので、ケースを洗う際などは手袋

		をする。 飼育頭数が増えて、家にタランチュラが満ちると、もうカユミは避けられないので、自分のほうが慣れることにする（筆者の場合）。刺激毛のカユミは患部を冷やすことでかなり押さえられ、副腎皮質ホルモンのヒドロコルチゾン系軟膏も効く。
2）飼育場所を検討する	タランチュラは、熱帯～亜熱帯性、および砂漠性の環境に棲み、野生では夜行性の行動をとっていると考えられる。地中または樹木の根元や洞などにトンネル状巣を作って そこに潜む。よって、直射日光を要しないばかりか、一日中日辺りのよい場所に個体をさらすのは望ましくない。 種によっては、夜間でないとシェルターから顔を出さないものもいる。夜行性の飼育者(笑)は、生活環境がタランチュラと相性がよいと言える。 室内の一日の温度変化を測ってみて、その落差の余り大きくない場所のほうが、飼育ケースの環境設定のコントロールはラクである。環境設定さえ誤らなければ、タランチュラは絶食に強い生き物なので、オフィスで鑑賞用や人寄せ(or 人遠ざけ：笑)用に飼えないことはない。 万一の逃亡を避ける二重三重の防止策を講じるのが必要で、屋外(ベランダなども)での飼育はさける方がよい。ケースを置く場所は「飼育部屋」との認識が相応しく、例え人間が同居する部屋であっても、ケースをクモが出た場合に、部屋の外へは出られないような工夫（ドアの隙間を目張りしておくなど）は必要だろう。 他の同居者や、隣人の理解が得られる場合はよいが、理解の得られぬ人に対していたずらに恐怖を煽るような「うちはタランチュラいますよ～」というコレ見よがしな行動は慎むべし。一般社会において、この動物は「愛玩動物」ではなく、「パニック用動物」と受けとめられているのだから。	

	幼体段階(体長 2cm 程度まで)	成長個体～成体段階(体長 2cm 以上)
3）床材と湿度	クモにとっての環境の基本は「足場」となる場。一般には「床材」と呼ばれる飼育ケースに敷き詰める土である。ただし、幼体時のお勧めは筆者の経験では「乾燥みずごけ(ヤマゴケ)」または「ヤシがら土」。いずれも 水を吸いやすい繊維質で柔らかく、自然界に存在する植物質の混じった土壌の代用になる。幼体は小さくひ弱なので、バーミキュライトのような堅く粒の大きい(かつ色も幼体と紛らわしい)ものは避けたい。床材に潜りこんだものを掘り出す際に押しつぶす、という事故が頻繁にある。	大きくなった個体は、どういうレイアウトで飼いたいか、によって床材を工夫する。筆者は、ヤシがら土、乾燥みずごけ、バーミキュライトの三つだけで、全ての種に対応している。床材の量は重要で、地中専好種(Hysterocrates 属のバブーンや東南アジア産アースタイガー類など、もっぱら地下に潜ってトンネル状巣を作りそこに居つく種)は、ケースの天上近くまで土を入れることで、安定した飼育環境となる。糸のシートを貼りめぐらして、ベッドのシーツを広げたようにしてしまう種(ｳｻﾝﾊﾞﾗｵﾚﾝｼﾞやｸﾞﾘｰﾝ ﾎﾞﾄﾙﾌﾞﾙｰなど)のばあい、床材の存在に関係なく、このシートがクモを 安定させる足場となる。 湿度は、いわゆる多湿系と呼ばれる種の場合、床材の底面が十分水を含んだ状態になるように維持

	湿度は、タランチュラ飼育に限らず、土壌に密接な動物飼育の基本になる条件だが、コツは、カラカラに乾かさず、結露するほど湿らさず、 ということだ。容器の底部によく水分を吸いこんだ湿った床材、上部の隙間の多い部分を比較的乾燥させる、ということで、クモ自身が好む微環境を選択する余地を残す、というのが最も効果的。 ただし、種によって、より湿った環境を好む種と、非常に乾燥した環境を好む種(特にバブーンの一部など砂漠性種)がいるので、その傾向は 確認しておく。 【樹上性種】 幼体時から、床材に潜ったりその上を歩き回るよりも、壁に登りたがる。 乾燥みずごけが、足場を提供することにもなってよい。特に通気性のよい空間を確保する足場でないと、「蒸れ」で死んでしまうことも多い。	しないと乾燥で死ぬことが多い。一般に、クモの体長ほどの直径の水を張った浅い容器を設置するとよい。ケース内の湿度環境には勾配があってクモがそれを選べるようにするのが理想的で、何%に統一すればよいというものではない。水容器上に腹部をかざしているのがみられるときは、ケース内が乾燥しすぎているとみてよい。タランチュラは床材をかなり掘りかえすから、水容器は安定したものか、固定するのが望ましい。 逆に湿度が高すぎて調子を壊すということもあるが、これは、湿気があって通気の悪い、雑菌繁殖や腐敗が進行しやすい環境に起因するらしいので、ケースの設定で通気に気をつける。 【ダニ･ハエ･カビの発生】 湿度の高い環境では避けられない面がある。コオロギに付着して侵入しがちなダニはクモと共にクモガタ類に属する近縁の仲間なので、殺ダニ剤等、化学薬品は使えない。これらが発生したら、広がらないうちに床材ごと交換し、もっと通気のよい環境を心がける。
4) ケースのサイズとシェルター、保温	幼体の飼育ケースは、口径 2〜4 ｾﾝﾁ試験管、口径 10 ｾﾝﾁ程度のプラカップ などを用いる。ただし、試験管のスポンジ蓋は、クモやコオロギがかじ って穴を掘っていくので、常に新品の状態を維持する注意が必要。 容器の大きさは、幼体が餌を自分でみつけて採るのに苦労するほど大き くないほうが、成長を促すのにふさわしい。幼体でも、種類によって、 滑らかな壁をよじ登れる種と、すぐに滑り落ちる種がいて、滑り落ちる 種にあまり背の高い容器を用意すると、落下時の事故につながりうる。 シェルターを必要とする幼体は少なく、必要なら自分で土に潜ってﾄﾝﾈﾙ を作る。	大きな個体の飼育ケースのサイズは、飼育だけならﾚｯｸﾞｽﾊﾟﾝの 2 倍ほどの水平面が確保されれば十分（ｽﾄｯｸを目的とする筆者の飼育ケースは、高さ 5 ｾﾝﾁの 100 円ﾀｯﾊﾟｰ。これで成体まで育てあげている）。複雑な巣構造などの生態面を楽しみたい場合は、もちろんそれに応じて広さを確保する。また繁殖に用いるメス成体は、なるべく広い容器で しばらく飼っておくのが交尾の準備として望ましい。プラケース、ガラス水槽、衣装ケース、樹上性種用の高さのある容器としてはパスタケースなどが使える。密封容器を転用する場合は、空気穴を開ける。樹上性種以外では、レッグスパンを越す高さの空間があかないように 配慮する。太った大型個体は、低い落差からの転落でも、腹部を損傷する。 広い容器での飼育の場合、シェルターを設けないと、個体が落ちつかず、やたら歩き回る傾向を示

	タランチュラの牙の威力は思いのほか強く、プラカップの蓋を開けることは朝メシ前。かならずテープなどで留める。また、空気穴に牙をかけ、柔らかいプラスチックなら食い破る。ちょうど缶切で蓋を丸く くりぬくように。 【保温】 小さなケースを直接加温することは、過熱の危険が大きいので、 大きめの水槽などの全体の空気を保温し、その中に小容器を配置すると よい。温度は少し高め 27～32℃とすると成長を促すのによい。	す場合がある。導入当初は探索行動といって、普通だが、これが続き、いつまでも天上やケース側面に貼りついているような場合は、環境が気にくわないのだから、個体がすっぽり隠れられるシェルターを人工的に設置してやる。それを利用して床材中に掘り進むことを促せる場合もある。 【保温】 ケースを直接保温する場合は、側面から保温するのが望ましい。下面にシートヒーターを敷くと、クモは、熱さを避けて下に掘り進み、角に行き当たってそこで熱死するということがある。25～28℃を中心として 23℃～32℃くらいの間に収めておけば、一般に問題ない。種ごとの微調整は、経験から把握する。

	幼体段階(体長 2cm 程度まで)	成長個体～成体段階(体長 2cm 以上)
5) 餌と水と掃除	幼体の餌サイズは、クモの頭胸部(背甲)長の半分～体長程度で、コオロギ、ミル ワーム、ショウジョウバエ、サシ(と羽化後のキンバエ)などが利用できる。コオロギ・ミルワームは小さいサイズのものを活用 するのでクモ幼体を多数飼育している場合は、養殖すると良い。脱皮 の最中など、餌がクモを襲うこともあるので、食べなければ取りのぞく、 即時食べない場合は、抵抗力を弱めて(コオロギの脚と牙を折る、ミル ワームを半分に切るなど)与えるのが望ましい。クモは一般に食べすぎで 死ぬことはまずなく、与えるだけ与えても害はないし、反対に絶食にもかなり耐えるので、給餌量に「標準」はない。 水分は餌の体液からも採り、容器壁につけた水滴からも飲む。なるべく 小さな水滴の霧吹きを2，3日おきにしてやり、水容器は(幼体が落ちて溺れるので)入れない。	大きな個体は、元気なコオロギを入れると、とび出して来て捕えるのが状態としても一番望ましいと思われる。跳びはねる虫を怖がる個体もたまにいるが、その場合は脚を折ったコオロギを与えるなどする。与えるだけ何頭もコオロギをほおばるような貪食な時期になるべく沢山食べさせておくのが、早期成長の秘訣。捕えられる虫ならば何でも良いが、屋内で捕えた殺虫剤を浴びている可能性のあるゴキブリなどは避けるべき。 かなり大きな個体には、量をかせぐために、マウスを与えることも考慮してよいが、食べ残しの腐敗には十分気をつける。個体によっては、死んだ餌でも採るので、解凍マウスや鶏の砂肝なども使える。樹上性種では、アマガエルなどもよい。 クモは体外消化で、餌の溶けた部分だけを飲むので、かならず食べかすが出るが、これは通常巣穴の外、ケージの端に捨てられるので、きわめて綺麗好きな動物といえる。カビやハエの温床とならぬようにカスは掃除する。 水容器から水を飲むので、なるべく設置する。餌の食べかすをその中に捨てて腐ることが多いので、ひんぱんに掃除が必要。そのため、水容器は取りだしやすい場所に置くのが理想的。樹上性種の場

	餌の食べかすは、ひんぱんに取りのぞく掃除が必要。とくに容器の小さい幼体では、餌の腐敗のために空気が悪くなって死なせることも多い。	合は、パスタケースなど筒状 容器の蓋を下にしてレイアウトし、底面が開く飼育環境とすれば、メンテナンスが容易。
6）クモの反応を観る／事故に対応する	飼育している日常の観察で、クモが環境を歓迎しているかどうかを見抜く眼が大切。 クモが脚を折り畳んで体の側面にくっつけて縮んでいる姿勢は、脱水症状である。ただちに水容器に口をつけさせるか、自分で飲む力がなければ、裏返しにして口器にスポイトで給水する。歩く力を失っていたら、脚を屈伸させることで、体内の体液循環を促すという方法も有効。 外への運搬等による冷気ショック、あるいはアルコールや有毒ガスに触れての仮死状態の場合には、温度と湿度を上げて脚を屈伸させ、水を飲ませる処置をとってみる。 タランチュラの病院はない。移動によるさらなるストレスを与えるよりも、自分でできる処置を下す他に術はない。 怪我をして出血しているタランチュラは、給水するとともに、止血のため傷口に片栗粉か瞬間接着剤を塗布する。 餌を採らなくなった状態が、病気や環境不全によるものか、成育サイクルにおける自然な絶食によるものなのかを見分けるのは難しい。歩き回る行動、脚の曲げ伸ばしのぎこちなさなどから、不自然さを感じたら、問題の存在を疑ってよい。食べないで弱っている個体に強制的に給餌するには、ピンセットで半殺しにしたコオロギを牙の間に鋏み込み、静かにピンセットを離すといった方法を取る。	
7）絶食、脱皮、成長	熱帯性種の幼体は、食べるだけ食べさせて満腹で食べなくなったら、脱皮を待つ、という繰り返しで、急速に成長させられることが多く、 この手法をパワーフィーディングと呼ぶ。脱皮前の幼体の絶食期間は短く、通常数日から1週間程度。 脱皮は、糸を張巡らしたシートの上にあお向けになって行われる。 幼体では数時間で終わってしまうので、最中を目撃できないことも 多いが、生体とそっくりそのままな抜殻を残して、毛まで生え変わるので、脱皮したては大変美しい。写真記録を撮るのに最適だが、体が固まるのに1，2日は待って給餌すること。 脱皮には若干高めの湿度環境が	成長個体になると、脱皮前の絶食期間が長い種もある。一般に、寒い（季節のある）地方の種ほど、年間で数ヵ月の絶食期間を経てから 脱皮するという例が多い。毛を飛ばす種では、腹部にできた禿げの 部分に見える地肌がピンク色から黒へと変化するのが、脱皮の兆候で、新しい毛の生えた皮膚が、古い皮の下に既にできていることを示している。 脱皮にはまる一日を要し、仰向けになってじっとしている個体を、死んだとか事故だとか錯覚してはならない。湿度を少しあげる他は、なるべく刺激をあたえず、脱皮を完了して自分で歩き回るまでそっとしておかねばならない。 脱皮がらは、サイズを測る、性別を確認する、専門家に送って種の鑑定に供するなど、色々役に立つが、刺激毛のある種については扱いに気をつける。 タランチュラは、メスが性成熟をしても、さらに脱皮

	理想的。乾きすぎると、不全を起こし、古い殻が体に付着したままになることや、最悪の場合、脚が抜けきらずに曲がった形で固定されてしまう。 小さい幼体ほど、一回の脱皮で成長比率は大きく、ﾚｯｸﾞｽﾊﾟﾝが 1.5 倍にもなったりする。幼体時、頻繁に餌を食べれば、脱皮周期は1ヵ月に一回程度。育つにつれ、間隔が長くなる。	を続けて少しずつ大きくなり続ける変わったクモである。飼育下でどの種がどこまで大きくなるかは、まだまだ例が少なくて何とも言えない。世界最大種は あなたの手元から生まれるかもしれないのだ(笑)。 オスは、性成熟をするのが最終脱皮で、寿命もそこから長くて1，2年 と限られるが、メスの寿命はよく分かっておらず、環境よく飼 われているタランチュラの「老衰寿命」は知られていない。

	幼体段階(体長 2cm 程度まで)	成長個体～成体段階(体長 2cm 以上)
8）性別鑑定と交尾産卵	幼体の成長について、オスとメスでは差があるらしいという興味ぶかい観察がある。確かに、急速に成長して早く成熟する個体はオスが多い、という経験則がある。確実な性別判定はもちろん、生殖器の成熟を待ってしかできない。しかし、将来の繁殖計画を念頭に複数の幼体を入手する際、留意すべきことがある。まず、同血統(同一卵のう)の個体同士を掛け合わすことは、避けること。実験的に、タランチュラの近親交配血統には、2，3代で奇形や不妊が出るという結果が複数報告されている。自然界ではオスメスに数年の成熟時期の差が出て、近親交配が遮断されているという推測も成り立つ。 また、複数血統の幼体を同時に入手した際には、将来オスとメスが同時期 に成熟するように、成長調整を試みるのも手だろう。オスは早期に成熟しがち なので、オスと分かった段階で、給餌を控える。メスはパワーフィーディング を続けて、なるべく早くオスに「追いつかせる」といった工夫。	タランチュラは性成熟すると、腹部下面の白い二対の書肺の間にあるメスの生殖口が盛り上がってくる。脱皮がらを内面から見ると、二つの貯精のうのポケット構造がはっきり確認できる。オスの場合は、精子をあらかじめ吸いとって溜めておく触肢の先端のスポイト状器官が膨らんでこれも明瞭。複数個体を見て観察に慣れてくると、未成熟個体でもキチン質化しつつあるメス生殖口の構造が見分けられるようになってくる。 メスは繁殖に備えて、広いケージで飼い、シェルターなどの巣と、そこから段々遠ざかる「メスの匂いの勾配」のある糸のシートが形成されていると、オスを導入したときに交尾が一般にスムーズに行きやすい。これなしにいきなり雌雄を出合わせると、即オスが食われるという事故も、種の普段の大人しさと 無関係に起こる。 オスは、野生でも成熟するとメス探しにさかんに歩き回るので、消耗を避けるため狭いケージに入れておく。密な糸で小さな精子網を張ったら、そこに落とした精子を触肢に準備したとみてよい。メスのケージにそっと導入し、オス食いを避けるためのピンセットでの緊急介入の準備をしつつ、見守る。 メス･オスとも触肢と前脚で地面を叩いて(タッピング)、振動のコミュニケーションを取りつつ、近づく。体を振るわせて、非常に小刻みなタッピングを始めたら、交尾への積極的なアプローチ。一方が逃げ回る場合は、無理に近づけさせると共食いに

	タランチュラの多くは、消滅の危惧される熱帯雨林等からやってきた貴重な 野生個体に起因する飼育個体群である。できるだけ入手経路（できればブリー ダー名）を明かにし、将来繁殖させる際にも、血統関係を明らかにできる ような、CB(飼育下繁殖)個体飼育の質の高さが求められる。 また、幸運にしてWCメス成体の持ちこみ腹から得られた仔グモについては、 親個体の種鑑定ないし、仔グモを育てて出たオス成体による種鑑定で、種を 確実に明かにすることが重要。	至る場合もあるので、日を改めて試みる。 交尾は、オスの第一脚でメスの牙を押さえるような体位で(オスメスのサイズ比と地中、樹上などの交尾場所によって若干異なる)行われ、短くて一瞬、長くて数分続く。触肢の生殖口への挿入時、メスが大きく体をのけぞらせて腰を折れば成功している確率は高い。交尾後、オスはメスの元から敏捷に離れようとするので、すぐに両者を隔離する。 メスにじゅうぶん食べさせて太らせて、産卵を待つ。産卵は夜間、糸で深い皿状の 網を作り、そこに卵隗を産んで、上を閉じることで卵のうを作る。産卵中は刺激を避けないと、不完全な段階で放棄することがある。
	自然孵化の場合	人工孵化の場合
9）孵卵、孵化	自然孵化の方式を選ぶ場合は、なるべく刺激を少なく（餌は与えず、給水も静かに）、母親まかせで卵のうの成熟を待つ。母親が卵のうを咥えて保護する場合、卵のうを回転させて、中の卵に均等に空気が触れるようにし、また卵のう表面のカビなどを口で掃除しているようだ。飼育ケース内の湿度の高い場所と湿度の低い場所のどちらを好んでいるか、なども仔細に観察して、卵のうの選好条件を判断できるという利点がある。また、孵化後、親が仔グモに給餌を行うというクモとして稀な生態をもつ種(Hysterocrates 属)の観察のためには、自然孵化のプロセスが望ましい。 危険として、親による卵食がある。何の刺激が引き金となるのかよくわからないが、産卵直後、あるいは孵化後幼体の出のう直前にも、親グモが卵と仔グモを食べてしまうという異常行動にでることがある。	人工孵化は、卵がいくらか乾燥して安定する産卵後2，3日で、卵のうを親からとりあげ、完全に人工的にセットした環境で孵卵する。孵化器は、湿らせたバーミキュライトを底につめたデリカップにガーゼかストッキングをかぶせて凹ませた中央部に、卵のうを配置する。卵のうはハエ･カビの侵入を避ける効果を高めるため、土の付着した外側の袋だけを取り去り、内側の綺麗な糸につつまれた袋の状態で、孵化器にいれる。ハエの侵入できない小さい針穴をあけた蓋をする。器具は全て蒸気滅菌しておく。孵化温度は通常 28～32℃。親がするかわりに、毎日1,2回卵のうの回転をしてやることが慣用。 乾燥系のバブーン類では、卵のうを地面に貼りつけ固定してしまうものもいる。この場合、外から剥がして、糸に包まれた状態のまま人工孵化にし、回転の必要はない。 3－4週間してから開のうすると、卵から脚が生えたような形の「後期胚」状態。一回脱皮をして1令幼体となる。1令で水を飲む。2令には体内の卵黄の栄養で脱皮し、それから餌を積極的に採るようになる。歩き出した個体は、別容器に取り分ける。産卵数は、種により、また栄養状態により様々だが、大型種で卵サイズ(8mm)も大きいｺﾞﾗｲｱｽﾊﾞｰﾄﾞ

		ｲｰﾀｰで 30 ほど、仔グモサイズの小さいｻｰﾓﾝﾋﾟﾝｸで 3000、通常(卵サイズ 2-4mm)は 200～300 で、樹上性種が少し少なめ。

10) 孵化幼体の扱い	自然孵化の場合は、孵化後、出のうした1～2令幼体は、卵のう周辺に一時期とどまり（まどい）、ある夜いっせいに散ろうとする。その際ケースの空気穴のサイズが幼体 の背甲直径以上であれば、するりと抜けて全個体が行列して逃げてしまうので要注意。孵化直後の幼体に噛まれることはまずないので、のんびりした動きのうちに一頭ずつ の容器に分けてしまうのが一般には賢明。 複数頭でしばらく共存させられる種もあり、その様子を観察するのもよいが、弱い 個体の共食いは一般に避けられない。 給餌が面倒なので共同飼いを継続するという場合は、将来繁殖用に、かならず 個別飼育するグループを別にとりわける。共同飼いを続けたケースでは、先に大きく なりがちなオスがメスを食べてしまう一方的な共食いが起こって、性別バラ ンスが崩れる、という予測がされており、現実に市場に出回る個体の性比が狂って いるのではないか、という憶測もなされている。 一人で数百頭を飼い切れない場合は、飼育者ネットワークを通じて飼育の分担を するとよい。成育ペースも異なるため、数年にわたって成熟個体が順に現れてくる、 という結果になり、繁殖ペアを探す上でも好都合だ。

「有毒生物であるタランチュラ」という認識について

「ブリーディングハウス　みるかし姫の館」では、タランチュラの飼育家に供するために、繁殖個体の販売をおこなっています。日本に元々生息しない「有毒生物」を輸入し、繁殖、譲渡することについて、ここで一言、「館」の 認識を公にしておきます。

そもそも医学的処置を要する程度に人間に害をなしうる有毒生物には、在来の アリ、ハチ、ムカデ、毒キノコ、ウルシ、マムシなど、数々のものが「自然にある」ものです。自然が失われてそうした「当たり前の毒を警戒する知恵」が、わたしたちの周りから消えたとはいえ、化学物質を始めとする「毒」が身の まわりから消えたわけではなく、日々私たちは毒と付き合う生活のなかにいます。毒とつきあう基本的常識は、一般人にも求められます。ひるがえって言えば、タランチュラもまた、常識をもって付き合えば、あつかえる「毒」です。

ある大きさを持つ生き物を飼うということは、多かれ少なかれ危険を伴うものです。「噛む」事故の危険性の最も高いのは犬ですし、だから飼い主は外出時には行動的な犬の綱を手放さないという常識を求められます。ピラニアの水槽に手をつっこまず、種類のわからないキノコを口に入れない。タランチュラに初めて出会う人びとにも、当然の常識としてそれくらいは期待していいでしょう。

日本に生息するスズメバチや犬の刺咬症で死者は出ていますが、タランチュラは

世界的に記録を見ても、毒による死亡例がありません。「クモといえば毒グモ」と不当に怖れられ遠ざけられてきたという面があります。ケースのなかに閉じ込めてある限り、あるいはケースから一時取り出しても距離を保っている限り、向こうから跳びついてくることは決してない生き物を、「致死的毒物」のように怖れる必要はないはずです。致死的な危険の伴う毒蛇などの輸出入には「poisonous」と明示した箱を用いる国際的義務がありますが、タランチュラはそういう必要も認められていません。もちろん、どんな世界にも生き物嫌いという傾向はあって、そういう文化的偏見のなかで、マイナーなペット飼育をする者が肩身の狭い思いをするのは、始めから覚悟の上でのことですが、「毒」ゆえに飼育すべきでないとか、法的規制をすべきという主張については、「害毒」の客観的な基準を先に議論すべきと思います。

さて、参考までに、万が一噛まれた際の処置方法。患部が腫れるので指輪腕輪などをただちに外し、冷やします。これで痛みも軽減されます。毒量が多いとかなり痛みますが、死ぬことはもちろんありませんし、重篤な症状に転化することもないので血清などは開発されていません。痛みは患部から、リンパ腺、さらに神経症状として筋肉の攣りなどを伴うことがあり、数週間後に症状が出ることもありますが、医者に行ってもできる処置は限られており、鎮痛剤の使用程度です。

しかし、他人に痛みを与える可能性のあるミスは許されませんので、飼育者は当然、タランチュラの逃亡を避ける万全の体勢を準備する当然の義務を負います。そのへんの自覚のない方に「館」は販売するつもりはありません。噛む可能性のある犬を飼う飼い主の心構えと同じことです。

トップにもどる。

最後に、タランチュラの購入、飼育を始めるにあたっては、当事者が具体的な心の準備や施設につき、経験ある者に相談して、飼育可能な状況にあることを自分で納得することが大切。万が一の事故は当然飼育者本人の責任となる。また、飼育個体の逃亡はそれだけで周辺住民の恐怖心やパニック反応を呼び、その合理性･必要性を越えて、この嫌われがちな素敵な動物の飼育保有に関しての社会的規制という危険につながることを忘れないでください。

以上の当たり前のことが守れる方は、素晴らしい魅力をもった沈黙の小猛獣と楽しい楽しい生活を満喫してください。現代人が忘れてしまった野生の迫力があなたの目のまえに展開されます。

タランチュラの誤解と魅力・・・

１０の真実　　八幡明彦

１）タランチュラに噛まれても死なない。

死亡例は知られていない。「致死性猛毒」は、冒険家や映画の作りだした伝説。
でも噛まれたら痛い。でかい牙見りゃわかるでしょ。餌を採り、身を守る武器。
野生に対しては、恐怖心でなく、敬意をもって、付き合うのが基本。

2）タランチュラ(トリクイグモ)は鳥をもっぱら食べているのではない。

たまたま鳥のヒナを獲っている個体を発見されたところから名前がついちゃった。 実際には、鳥は目がいいからクモを襲うケースが多いだろうし、タランチュラが親鳥不在の巣を嗅ぎあてるという幸運は少ないはず。もっぱら虫か小さなトカゲ・カエルを食べていると思われる。

3）タランチュラは血を吸うのではない。

クモの食事法は、口から出した消化液で獲物を溶かしてから、液体だけを 吸い取るという手法。蚊みたいに針のような口をさして体液をチューチュー 吸い取るわけじゃない。

4）タランチュラは十本脚？？　違います一番前のは触肢。

タランチュラの歩脚は、他のクモと同じ8本。長い触肢は、歩くときにアンテナ のかわりに探ったり、餌をつかんだり、オスの場合は交尾にも使う。眼は殆ど 見えなくて、手探りで世界を感じてる。脚の裏はベルベットのような繊細 な毛が振動を捕えている。世界の知覚の仕方が、彼らと脊椎動物じゃ全然違う。

5）タランチュラは馴れない。飼育者が彼らの野生に慣れるしかない。

視覚による認識力と理解力の優れた爬虫類は飼育者を覚えたり、馴れたりする ものもいる。でも、クモは馴れない。いつまでも野生児。それが魅力。 彼らの故郷、食いつ食われつの熱帯雨林に思いを馳せて欲しい。

6）タランチュラは飢えに強く、長生き。
寿命がまだ分かってないほど。何十年も生きそう。

種類によっては、半年以上も食べないこともある。 オスは成熟したら短命だが、メスは、何十年も飼われた記録がある。多くの 種はまだ飼育の歴史が短くて、寿命がどこまでいくか、多いに期待できる。

7）タランチュラは、清潔好き、匂わない。

糞の始末や体臭が気になってしょうがない哺乳類に比べて、クモは驚くほど きれい好き。糞も食べかすもケースの隅に自分でまとめてゴミを出す。糞は 不純物が少なく匂わず、クモ自体にノミやシラミはわかないし。

8）タランチュラは、生き餌でなくても食べる。

…ばあいもある。
生きた昆虫が食われる様が怖くて見てられないという方に朗報。タランチュラは 個体によって

は、鶏肉を拾い上げて食ったりする。スーパーの肉だけで幼体から 親まで飼えるかどうかは、挑戦してみないとわからない。

９）タランチュラは、子沢山。
ブリーダーになれば、あなたも子グモ長者！餌貧乏（笑）

一回に数百の卵を産む。孵った子グモは小さなケースでたいしたスペースを取らず に育てられて、空間的には経済的。世界経済が金本位制じゃなく、蜘蛛本位制だったら なぁ。ぶつぶつ。
全部育って大きくなったら、どうしよう？ 食べちゃえ。。。ないこともない(汗)。味はカニ級。

１０）タランチュラは、吠えない。じゃれつかない。
距離をもったオトナの付き合いができる。

やたらスキンシップを求めるラブラブ飼育者の皆さん向きではありません、あしからず。「触りたい、でも触っちゃダメ。寄ると噛むわよ」という距離で愛を育くめるオトナの あなたに、どうぞ。

「クモ」と付くクモ以外の動物も飼っちゃおう、というページ　八幡明彦

ちょっと無理のある企画。でも、みるかし姫の蜘蛛好きはとどまるところを知らず、「クモ」と名に付くなら何でも、と欲望が広がっていくのであった。まず思い付く のが、

「海蜘蛛」。 ウミグモ(Pycnogonida)綱はクモ型綱に近縁だが、たとえば、 左のトックリウミグモ一種（*Ascorhynchus*)は、 極寒・暗黒の深海（2000m）から採取されたもの。 この環境を再現するのが困難なのはもちろん、まずは深海生物を展示する水族館にいって飼育の 設備と秘訣をうかがう必要あり。その上で、寒冷深海ダイバーの免許を取って、オホーツク海の 流氷の下に潜って採集してくるという、決死の覚悟を決めねばなるまい。

・・・と、思っていたら、ウミグモのなかにはイソウミグモ科など、潮間帯の石の下や 海草の間に棲む数ミリサイズの小型種もいることがわかった（右はトゲイソウミグモ）。 これなら採集できるかも。「マイクロ・アクアリウム」ということになるけど。。。

「蜘蛛猿」。クモザル属(*Ateles spp.*)は、南米熱帯雨林 にすむ手足と尾の長い猿であるが、しっぽに（指紋・掌紋ならぬ）「尾紋」があって、 枝に巻き付けてぶら下がることができる。 CITES のⅡ表にリストされているが、ペット市場にはでているようだ。カリフォルニアで 1900 ドルで売りに出されているのをネット上で見たことがある。結構やんちゃだと書いてあった。

大きさと行動性を考えると、室内飼育は無理。 愛知県犬山のモンキーパークには、「クモザルの村」があるから、まずそこで一ヶ月くらい飼育の修行して、サルとのコミュニケーションを学んでから、

おもむろに購入を考えよう。ちなみに、このサルは、新世界サルのなかでは高度に進化した方で、集団生活を営むという。一頭を切り離して飼うより、自分が「クモザルの村」に住むように受け入れてもらう方が理想的かもしれない。

なお、ブラジルに棲む(*Brachyteles arachnoides*:Wooly Spider Monkey)は、その種名もずばり「arachnoides(クモのような)」なのだが、CITES I 表にのった恐ろしく希少種で、世界希少種の十本の指に入るという。

「蜘蛛の巣陸亀」。クモノスリクガメ(*Pixys arachnoides*)は、甲羅の黄色い線の模様がクモの網状であることから名づけられた、マダガスカル産のリクガメ。これも乱獲で極端に数が減っている。クモの巣 模様は個体差があるので、奇麗なものは価格も高いらしい。うー。宝くじでも買うか。。。。
上の二種の「クモもの」に比べると格段にペットらしいとはいえ、生態がわかっていない面もあり、飼育は難しそう。

というわけで(?)、クモノスリクガメよりは安くて、やはり甲羅に放射状の線の模様がはいっている、ホシガメ(星亀)を飼うことにした('98 ちょっと強引な正当化 でも数年後、死なせてしまった。リクガメは難しいです)。

「蜘蛛海星」 クモヒトデ綱(Ophiuroidea:蛇尾類)は、五本の触手が柔らかくうねうねと動くヒトデで、海岸のタイドプールなどにも 住んでいるのを見かける。これなら、飼えるかも知れない! でも、何食ってんだろう。
飼育経験のある人のHP伝言板で問い合わせてみたら、こんな返事があった。

クモヒトデ類は一般にプランクトン、有機沈澱物、腐肉、底生小動物などを食べるようです。 水族館の人に聞きますと、オキアミ＋アミ＋魚肉＋テトラミン等を混ぜてミンチにし、網でこして与えているそうです。 口の小さい生き物なので、えさに工夫が必要かも知れません。(あつもりさん)

というわけで、飼い始めたのは、腕長 5cm ほどの宮古島産(右上'99 年)。分裂して勝手に殖えたり、古いのは死んだり、長く飼えます。本当は夜間ダイビングで見た湾長 30cm 位の巨大なの(右中'99)を飼ってみたいのだが。。。

図鑑で見てみると、クモヒトデはいろいろ美しい種もいて、たとえば、盤の直径 12mm で腕長はその 8 倍というモモイロウデナガクモヒトデ(*Ophiogymna elegans*:右) は、ピンク色に赤色斑紋・横縞のある美しい種で、日本では相模湾以西の太平洋 岸でトゲトサカの群体に絡まっているという。六腕の小型種・ニシキクモヒトデ (*Ophiothela danae*)も美しく、赤・桃・緑・紫・褐色など色彩変異に富む らしい。単褐色に黒で桜の紋が染め 抜かれたワモンクモヒトデ(*Ophiolepis superba*)も渋い。

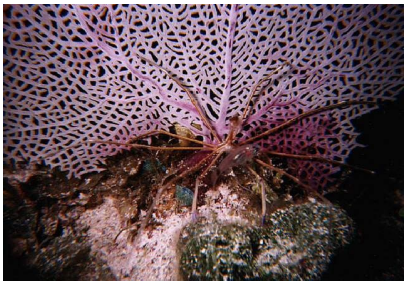
ついでに、ニホンクモヒトデの生殖巣内に寄生する体長 11mm のクモヒトデヒラムシ(*Discoplana takewakii*)も、「クモ」がつくのでエントリー。

「蜘蛛貝」。 珊瑚礁にすむ、クモガイ(*Lambis lambis*、英名:Spider Conch Shell)は、貝殻の収拾マニアがいるのであろう。たとえばインドは、この属に限ってはいかなる形態 (貝殻だけでも)であれ輸出を禁ずるとしている。

同属でサソリガイもあるが、クモガイの方が大きく高さ 20 センチ位になる。 日本でも紀伊半島以南には、いるとのこと。

「蜘蛛蟹」。カイメン(海綿)が表面に付着・共生した クモガニ科には、釣りの餌にされるものもあるらしいから、入手は難しくないはず。比較的浅いところに住んでいるので、飼うのも容易 か。こちらも、先のＨＰ伝言板で情報提供があった。

あの「クモガニ」(右) はアケウスという種類ですね。 クモガニ科は大きなグループで、日本には１５０種以上います。ずばり「クモガニ(*Oncinopus araneus*)」という 種類もいますが、これやアケウスなんかはやや深場のカニですので、自家採集は難しいかも。 磯の潮だまりなんかだとイソクズガニ、コワタクズガニ、ヨツハモガニ、イッカクガニなどの クモガニ類が採集しやすいですが、姿があまり蜘蛛っぽくありません(＾＾； ショップでは、 アロークラブ(左) 、デコレータークラブなどのクモガニ類が入手可能のようです。 いずれの場合も、飼育はそう難しいものではないようです。 ちなみに、冬の味覚ズワイガニや日本特産のタカアシガニもクモガニ科です。ただ、こちらは 家庭で飼うにはちょっと・・・(＾＾；；；(あつもりさん)

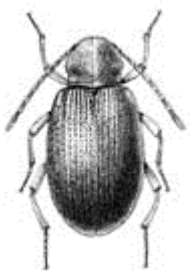


「蜘蛛海老」。
日本には、クダヤギクモエビ(*Uroptychus kudayagi*: 左)というアカバナクダヤギと共生する種がいて(甲長 6mm)、相模湾、南紀串本、天草灘などの 30-90M の浅海域に住み、 薄いオレンジまたはピンク色がかった透明で、赤色斑があり、とても美しい。 右は、クモエビ科(Chirostylidae)の ムギワラエビ(*C.dolichopus*)で水深 12-70M にすんでいる。

さて、海産動物が続いたが、クモとは遠縁の昆虫にも、いた。

「蜘蛛の巣紋錆髪切」。クモノスモンサビカミキリ (*Graphidessa venata*)は、上翅中央から後方に黄白色毛による顕著な「クモの巣」状紋があることから、この名がついた(『日本産カミキリムシ 検索図説』)。

「蜘蛛蝿」。クモバエ科のケブカクモバエ (Penicillidia jenyesii)は、2.5-3mm の小さな体だが、翅を欠き、頭部は 極めて小さく円筒状で、複眼がなく単眼が一対だけ。胸部は偏平でほぼ六角形、 そこから丈夫な足がはえている様は、確かに小さなクモと見まがわんばかり。 これが、ユビナガコウモリの寄生虫。北海道を除く日本全土にいる。(『原色日本昆虫図鑑』)



アメリカ・オーストラリアなどには、種などに付く農業害虫として知られる Spider beetle がいる。和名はヒョウホンムシ。

「蜘蛛刈鳥」。
ちょっとこまったのが、とくにクモを餌にしているような、クモカリドリ属(*Arachnothera spp.*) 英語名も、Spider Hunter。熱帯にすむタイヨウチョウ科の一群だが、『鳥の写真図鑑：ヴォーグ社』にハイムネクモカリドリ(*A. affinis*)が 出ていて

体長 17cm、長いくちばしで花の蜜を吸ったり、種子を食べたり、 葉上のクモを食べるとありました。別にクモを餌にやらんでもよいなら、 飼ってもよいなぁ。

も一つ困りまくるのが、もう動物そのものじゃないが、
「蜘蛛茸」。
いわゆる「冬蟲夏草」に属する菌類のうち、クモをわざわざ選んで生えるキノコ。 キシノウエトタテグモなどに生えるクモタケ(*Isaria atypicola*:右) は有名だが、『原色冬虫夏草図鑑』には実に 50 種もクモタケ類がのっていて、コガネグモ、 タナグモ、カニグモ、ヒメグモ、トタテグモ、アシダカグモの各科で寄生が見られた、 というのだから恐ろしい。「寄生」といっても、宿主であるクモを殺してその 死体の栄養分で育つ。この図鑑には、21 ページにわたりクモの死体から 生えた様々な形態のキノコの精密画が描かれており、ラッキョのようなキノコが びっしりと生えてクモを覆いつくし、脚だけが無残に見えて いる、といった図解に、ぷつぷつと粟立つのは、クモ好きのみるかし姫でなくとも、必定。中には、クモノコウラツブタケ(蜘蛛之甲羅粒茸:左)なんて、不思議な名のやつ もある。 異色のオカルト的図鑑なので、一見をお勧め。

これは、絶対に、わざわざ飼いたくはない。50 年に一度とか、結構発生は希少なもの らしいけど。

植物ということでは、**「蜘蛛蘭」。**クモランと呼ばれるものは多く、spider orchid (*Brassia caudata*) 、 Summer spider orchid (*Caladenia helvina*)、 *Ophrys arachnites 他各種*、*Arachnicanthe clerkei*、 Water-spider orchid (Habenaria repens:左) などなど。英名 spider orchid と ラテン名各種の対照表は、こちら。 *Arachnis* は、"scorpion orchid"ともいうらしい。蘭がクモに擬態したところで、虫を遠ざける効果こそあれ、授粉のために近づけ るのには逆効果なので、虫たちの目は「クモ擬態」とは見えていないのだろう。

日本に生息する「クモラン(*Taeniophyllum aphyllum*)」があるということも、「でんぱたんち」さんからメールで教えていただきました。「Spider orchid のように 花が(クモに)似ているのではなく、全体の姿から来ています。木の幹などの表面 に偏平な根を広げて着生し、葉は退化していて、葉緑素を含む根で光合成を行う という変わった形態をもっています。写真(右)でも花は咲いていますが、非常に小さく 黄緑色で目立ちません。1本の根の長さは2−3cm です。ちなみに野生蘭を扱う山野草店でたまに売られていますが、割と栽培は難しいようです。

「蜘蛛之巣羊歯」(クモノスシダ:*Camptosorus sibiricus*)、 **「蜘蛛之巣万代草」**(クモノスバンダイソウ／ cobweb houseleek:*Sempervivum arachnoideum*) 、 Spider Lily もある。

「蜘蛛守宮」(クモヤモリ／スパイダー・ゲッコー:*Agamura persica*)**NEW！**

この種は、、 Global Gecko Association ホームページにも使われている。 '00 年に飼育を試みたが、当時まだ飼育法があまり知られていなくて、 死なせてしまった。その後産地のアフガニスタンは全土を空爆さ れたから、もう入荷もないのかもしれない。

ウチワヤモリ（*Ptyodactylus hasselquistii*）が、「スパイダー・ ゲッコー」の名で出ていることもある。

学名に「arachnoides(クモのような)」などがつくのも、結構いそうなので、調べてみた。

たとえば、平べったい円形をした、カシパンウニの仲間で、 Arachnoides 属というのがある。オーストラリア産。
また、植物でも、 *Leptospermum arachnoides* という木がオーストラリアに。

「araneus」というオニグモ属の学名が種名についているのもあるが、 こちらも「クモもの」なのだろうか。たとえば、ヨーロッパに棲む トガリネズミ の一種、*Sorex araneus*: Eurasian Common Shrew。これはモグラの仲間 の食虫目。人間を含む全哺乳類の祖先に近いといわれている動物。 夜行性の行動派なのでエネルギー消費が大きく、 3時間絶食すると死んでしまう程で、一日に体重とほぼ同量のムシを食べる。ものすごい大食漢だから、 飼育は大変そう。だいいち、シェークスピアの戯曲「じゃじゃ馬ならし」の原題は、"Taming of the shrew"(トガリネズミ馴らし)だから、人間には絶対馴れないって ことかな。

「ヤシガニ」（*Birgus latro*）は、ちょっとこじつけ(?)なんだけど、 インドネシアやサイパンなどでは「蜘蛛の仲間と思われている」との情報あり。 十脚目オカヤドカリ科ですが、第5脚が折りたたまれた腹部の下に隠れていて、 8本脚に見えるんですね。樹に登ったり、貝殻背負わなかったり、たしかに 「ヤドカリ」の生態をかなり離れてしまった「怪物」です。

ペットショップに頼んで入荷してもらいました。怪力でも壊されないように特製ケージを作って飼ってみましたが、これは無理ですね、狭い室内飼育は。 沖縄で庭で飼うとかしないと。その後、絶滅危惧種に指定もされたので、勧めません。

→ ＞＞「ヤシガニを飼う？」のページ

ほかにも、クモ型綱以外の「クモもの」、こんなのあるよ、という情報寄せてください。
「私は飼っとる」というお便りも歓迎。

香港・アジア・　　タランチュラ奇談

八幡明彦

このページは 1998 年香港在住時に作ったページ。学名等変更がありましたので、いずれ訂正します。

香港ペット街に異色をはなつ「奇珍屋」に行こう

香港旺角通菜街（ＫＣＲ廣九鉄道「旺角駅」弼街方面へ出る） Fax.2754-2968

香港で最も人気のあるペットはサカナでしょう。大きな水槽に金魚・熱帯魚を飼うのは当たり前、レストランともなればアジア・アロワナを置いているところも少なくありま せん。ペット用のサカナのメッカは、九龍(カオルン)の通菜(トンチョイ)街です。何十 軒もの金魚・鯉・熱帯魚屋が軒をつらねます。週末ともなれば大変な賑わいです。

さて、このペット通りには、ハムスター屋などもあるのですが、爬虫・両生類屋も3 件だけあります。中でも異彩をはなつのが、**奇珍屋**、英語名"Monster House"。ほんの6畳一間ほどのスペースの小さな店なんですが、爬虫・両生類の他に、タランチュラを あつかっています。長髪のケンさんという兄ちゃんがクモ担当で、もの静かな、売り込 む気のあるのかないのか良く分からない人ですが、こちらがクモに興味があって、デリ カップを平気で手に取ったりすると、「にいちゃん、そっちのキングバブーンはどうや？ 元気ええで。」といった調子で(英語ですけど)誘いをかけてきます。（そして、キング バブーンを買ったとき、「プラケースもいるか？ そしたら 30 香港ドル増しね」と言わ れたときは、開いた口がふさがらんかった。そりゃ、ケースごといるわいな。誰が あんな凶暴なクモ素手で持って帰りますかっちゅうの！）

この奇妙な店の見どころは、何といっても怪しげな「中国名」（と、やっぱり英語名も ちょくちょく怪しげ）。たとえば、キングバブーンが「皇帝把布」とか、ゼブラレッグが 「斑馬脚蜘蛛」とかは直訳で分かるんだけど、「老虎尾藍蜘蛛」（英語名タイガー ブルーも初耳）とか、「重金属」（ヘビメタか！ 英語名はメタリック・ゴールド）とか、 さらには「印度熱帯雨林花蜘蛛」が実は西アフリカ産のトーゴ・スターバーストだったという めちゃくちゃな話も。

すべてアメリカからの輸入で、価格はアメリカ相場とさほど変わらないので、良心的 ではあります。クモ形類のビネガロン や ヒヨケムシが入ったり、結構マニアックなところもあります。 ただ、学名や原産地などほとんど気にせず売っているので、いつも買ったあとで、正体 を確認するのに困ったりします。通菜街を行き来する香港人は、ものめずらしそうに覗いては、広東語できゃあきゃあ言っていく、「名物」ペットショップです。

タイ・バンコック週末に出現する巨大青空市場の「ヌンの店」

チャトゥチャク・マーケットは、土日にだけ開くバンコック郊外の青空市場。衣服、食器、 電器部品から、生鮮食料、植木、ペット、観光みやげまで、ありとあらゆるものが手に はいる巨大なマーケットです。ペットのコーナーにいくと、金魚、熱帯魚、犬猫にくわえ、 爬虫両生類の店もあります。ヌンの店(看板があるわけではありません)では、「黒、青、 茶」の三種類のタランチュラを扱っています。学名はおろか、英語名も知らずにただ、黒いの、青いの、で通しているぐらいですから、まあめちゃくちゃ安い（とくにコバルトブルー 成体 2200 円とか、タイランドブラックらしき地元産 1500 円とか）とはいえ、みなWC (野生採集個体)で、健康状態は保証のほどではありません。ペットボトルのなかに閉じ 込められたタランチュラやトカゲたちは、ちょっとかわいそうで、思わず買い取ってしまいたくなったりします。

この店の見どころは、恐ろしいタランチュラのハンドリング。無知なのか、地元民に は既に毒への免疫があるのか、凶暴の極致・コバルトブルーやタイランドブラックらしき 大型種を平気で素手に乗せたりして見せるのです。管理状態が悪くて個体が弱っている (笑)可能性があるとはいえ、普通のディーラーには真似できぬわざです。店の人は ほとんど英語はできませんから、タイ語で「ほら、こんなにおとなしいよ。」なんて 言って売り込んでたら、これは恐怖です。ここで買ったコバルト・ブルーは、我が家で 元気に暴れまくって(笑)おり、私はケージに箸をいれるときも細心の注意を払います。 素手なんて。。。

食用タランチュラの国

実は、タイ北部の先住民の間では、タランチュラを食べます。「タイランド・エディブル」(Haplopelma albostriatum)という種類がおりますが、"Edible"とは「食用」の意です。そんなことを知らなかっ た数年前、タイ北部に学生たちと旅行して、チェンマイで最後の晩、地元のうけいれをしてくれた若者が、郷土料理レストランに連れていってくれました。牛の脳みそだの、 肉のサシミだの、コオロギのから揚げだの食べさせられた後、「まさか、クモはあるまい、 あったら食っちゃる！」と冗談を言ってみたら、店の人が「うちの店にはありますよ」。「しまった！」と思ったものの、私のクモ好きを知る学生達にはやし立てられてひっこみがつかず、「よーし、注文しよう!」と一大決心したところ、幸か不幸か、その日は食材(笑)が切れてて 料理はできませんでした。ほっ...^_^;;。 「またのお来しを...」

のちに聞いたことですが、タイ政府は食用タランチュラの絶滅を心配して保護種に 指定しているとか。CITES条約の指定にはかかっていませんが、WCの同種は、 なるべく飼育下で繁殖させましょう。そして、子どもがたくさん生まれたら、我々も 一匹くらい(物は試しに)食べてみようか。クモではありませんが、クモ形類に系統分類上 近縁の カブトガニは、タイではもっとポピュラーな料理です。こっちは、バンコックで食べまし た。日本だったら天然記念物なのにぃ！

(後日談:香港から近い中国アモイではまだ生きている新鮮なカブトガニを海鮮料理店で 売ってました。750 円で料理してもらった上に、殻をお土産にもらって帰りました。 よーし。次はカブトガニの生体輸入だぁ！)

もうひとつ、タランチュラを食用にする土地はブラジル・アマゾン。世界最大級のタランチュラ、 ゴライアス・バードイーターを食べているという贅沢な(?)先住民族 Piaroa がいます。ビデオ 番組で見ました。儀式に用いるかぶりものに金属のタランチュラがあしらってあるのにも 注目。食べかたは、

- 腹部をちぎって、中身を葉っぱの上に出し、葉っぱで包み焼きとする。
- 脚は焼いて、カニのように食べる。
- 最後に牙を楊枝につかって、歯の掃除をする。

というのがマナーのようです。

この番組制作について、くわしくはこちら。 取材をしたのは、カナダのタランチュラ専門家リック・ウェスト。

セレノコスミア属の謎のクモたちについて

私・みるかし姫がちょっと気になる東南アジア・オセアニア系のタランチュラ は、セレノコスミア。まだ分類もはっきりしてないんですけど、以下のような何種類かが知られています。

オーストラリアのトオボエオオツチグモ(*Selenocosmia crasipes*)

「その足跡は引きずっていったことを示していた。我々は追跡して 16 メートル離れたところでニワトリを見つけた。仲間の一人がそれをつかむと、蜘蛛は抵抗して引っ張り返した。観察すると。直径が 5 センチメートルほどの穴の底からニワトリの足の一方をつかんだクモがいるのがわかった。」(1919 年キスホルム氏の記述・『クモ・ウォッチング』ポール・ヒルヤードより)

「ウズラ食い蜘蛛(Quail Eater)」の異名をもとるトオボエオオツチグモ(Barking Tarantula) が、実際にニワトリを獲れるかどうかは疑問です。そのサイズはせいぜい7センチですから。「遠吠えする」というのもスゴイ表現ですが、キング・バブーン式の触肢とあごの付け根を摩擦させる 威嚇音「histling」ではなく、実は捕まったウズラの声ではないか、という意見もあります(シドニーの ハリー・ウィルソン氏)。いずれにせよ、謎の多いクモです。

オーストラリアは、生物の輸出入に厳しい制限を課しているので、この種が外で 売りに出る可能性はありません。逆にオーストラリア内でタランチュラを飼うとなると、 このクモくらいしか大きなサイズのものはない、とのことです。最近、シドニーの ペットショップにもお目見えしているようです。

The Pet Centre, 127 York Street, Sydney 2000, NSW, Australia phone 61-2-9264 3515

Kellyville Pets, 106b Windsor Road, Kellyville 2155, NSW Australia, phone 61-2-9629 3282

オーストラリアご旅行の際には、ぜひお立ち寄りを。

ヴェトナム・ブラックベルベット

(*Selenocosmia sp ?*と して入手したのですが、のちに *Coremiocnemis sp* と同定されました)は、私のお気に入 りの新種です。アメリカ・フロリダの Glades Herp から個人輸入しました。 名前は「ベトコンの美少女」といいます。(とか、言ってたら、Glades Herp から連絡 がきて、「ごめんごめん、あれ、ベトナム産じゃなくてマレーシア産だったらしい」 とのこと。うーむ。これだからアジア産は謎めいている。単にいいかげんに売られている、 ともいえるが。でも、もう名前までつけちゃったのに、どうしてくれるん！)

つやのある真っ黒なスレンダーボディで、俊足、凶暴。まさに黒豹！ 前脚をふ りあげた威嚇姿勢をとったとき、鋭く長い牙をむき出す様子は 圧巻です。まだ全長 10 センチほどですが、良く食べるので、もっともっと大き くなったらいいなあ、と期待しています。

でも、絶対に逃がしちゃまずい一頭。

＜吠え声をあげニワトリをも殺せるというトオボエ オオツチグモの一種が、香港在住の日本人宅から逃 走し、香港警察に加え、中国人民軍が出動する騒ぎ＞

なんて国際面をにぎわしたくありません。

インドネシアのジャワ･イエローニー
Selenocosmia javanensis

ニューギニアのマウント･オブリー･ブラウン
Selenocosmia lanipes

他にも、
S. honesta ファク･ファク･オチェ（パシフィック･オチェ）
S. javanensis sp. スマトラ･マスタードブラウン
S. lyra アジアン･ブラウン
S. stirlingi オーストラリアン･ブラウン
S. strubelli インドネシアン･チェスナッツ
など、採集地によって異なる名がつけられてます。東南アジア･オ セアニアは、島で互いに隔離されるため、種が多様化するんですね。アメリ カのリック･ブロウマンによると、最近タランチュラ市場に出てきたらしく、 まだアメリカでのブリーディングはないだろうといってます。

香港にて発見、本属の新種だったら、*Selenocosmia Mirukashii*と命名の予定
カナダのリック･ウェストさんから、香港に棲息するタランチュラがいるという 情報をいただいて、山道を探していて採集したものです。ハリー･ウィルソン氏によると、 中国大陸には体長 10 センチになる *Selenocosmia huwena* が記録されている といいます。中国は、まだまだタランチュラ未知の世界です。

中国の *S.huwena* については、タランチュラディーラーの間でも謎のよう ですが、1997 年中国から発表の毒性に関する論文に名前が見られます。

香港タランチュラ･オフ実現！！

香港のタランチュラキーパーと出会わない。。。と嘆いてた私ですが、 英文HPを開いていらい、香港在住の人からメールが届くようになりまし た。さっそく会おう、ということになった二人と、「奇珍屋」で待ち合わせ、そのあと我が家へと、初の香港タランチュラ･ オフが 98 年旧正月を目の前に実現しました。

ニック･ウォンは、ロックバンド「関係」の仕事で東京にもちょくちょく行く、 という若者で、タランチュラ飼育歴2年、毎土曜に奇珍屋にいっては、無料奉 仕で仕事を手伝っているという「奇珍な」青年です。タランチュラ各種にかな り詳しく、かれの情報では、例の 謎のタイガーブルー幼体（「老虎尾藍蜘蛛」）はコバルトブルーではなく、 タイランドタイガーとのこと。インタネットで見た日本のクモの値段にあきれ かえっているのですが、私が香港への個人輸入をしたことを、農漁局、奇珍屋の ケン、というルートを通じて知ったらしく（狭い世界じゃ）、「ブルーアロー ・バードイーター、輸入したんだって？」と興味深々。次の個人輸入では、香 港でも高価なサブフスカを入手したいといってました。

もう一人は、いいおっさんのエディ･チョウ。サソリのキーパーだったのが、 最近タランチュラ購入を決断。どれがいいか、としきりに英文MLで尋ねた 結果、キング･バブーンを買ったそうです。「ちょっとアラクノフォビア気味」 という彼は、我が家に来て、初めてのチリコモのハンドリングにはしゃいでい ました。

ニックはカメラ持参で、 我が家のクモたちを写真に収めていましたが、特に東京･爬虫類倶楽部で 買った成体「タイランド･ブラック」（後記：実は、別種･Phlogiellus sp.と判明） の美しいベルベット肌に魅入られた様子。 エディは、私のご推薦通り、次はぜひ ストレートホーンドを欲しいから、個人 輸入の際はぜひ一報くれ、とのこと。(ちなみに私のストレートホーンドの写真は、 後日奇珍屋の店頭に張り出されていました。)

ゆっくりいすに座ってくつろぐまもなく、机の上に次々にクモのケースをなら べて、あーだこーだと3人で大騒ぎ。家族はあきれて、別の部屋に引っ込んで いました。

その翌日、もうひとり別の香港在住のタランチュラキーパーからメール。「あんた、通菜街ペット通り界隈でえらく有名になってまっせ。みんな、話題にしてますがな、自分も一度ウチにおじゃましてよいか」との内容。そうかぁ、こっちは広東語できんもんやから、みんなが「おい、またあの変な日本人来てんでぇ」と、うわさしてたとは、ツユ知らず（笑）。奇珍屋が「奇珍」だと、 こうしてHPに書いている海松檜姫こそ、香港で最も「奇珍」な日本人と思われてたりし て。。。

「クモはペットとしてみとめない」：香港当局の暴言

香港へのタランチュラ輸入を試みようと、漁農処(Agricultre & Fisheries Department)に問い合わせてみました。1月にもらった返信は、「 CITES(ワシントン条約)の適用を受けるほかには、クモに適用される規制は、香港にはない。 ただし、毒性の極めて強い(very poisonous)クモの輸入は奨励(recommend)しない」 というものでした。その後、アメリカからの個人輸入便が届いた際、空港の通関 手続きで気づいたのは、爬虫類は魚農処の事前許可が必要だがクモは許可なしで自由に通過、ということ。

ところが、後日ワシントン条約(第Ⅱ種)対象のタランチュラの輸入許可を申請したところ、「 メキシカンレッドニーは、公衆安全の見地から、輸入許可しない」と、驚くべ き返信が帰ってきました。もっともおとなしいクモをつかまえて「公衆安全への脅威」なんて、そんなあほな、と思って、さらに問い合わせの手紙を送ったと ころ、今度は、
「クモの輸入は推奨しません。クモは一般に受け入れられるペットの定義にあいません。多くは攻撃的で、噛まれれば痛みを伴います。もし逃走したら、 近隣の人々を恐怖に陥れ(terrorise)、公衆をパニックに導くかもしれませ ん。また、クモは病気を自動的に媒介します。...妥当な情報を集めるのに 時間がかかって、返答が遅れたことをお詫びします。」
ときました。これじゃあ、どんどん悪くなっていく！
勝手にペットの定義を独占するなー。

terrorising(恐怖政治)は、お前たちの方だー。
クモが病気を媒介なんて聞いたことないぞー。
どこから、こんなインチキ情報集めてきたんじゃー。
と、叫んでみたところで、所詮、お役所ってこんなもの？(ちなみに、中国返還 後も、大半の役人は替わってないので、これは英国時代から引き継がれたクモ への偏見の産物)
もう、いい。こんな連中に二度と相談なんかしません。クモの輸入規制する 法律は香港にはないんですから、だまって個人輸入するのみ（ワシントン条約 対象種以外をねー）。無知の極致の漁農処の推奨なんか受けなくても、ペットぐらい自分で決めます。

タランチュラ以外の海松橿姫のペットたち：

−飼っているもの･飼っていたもの−　八幡明彦

無脊椎動物類

【クモ形綱】

広褄網蛛
ジョウゴグモ
オオジョロウグモ
アシダカグモ
オニグモ一種
ジョロウグモ
ナガコガネグモ
ゴミグモ
カバキコマチグモ
ヤチグモ
コガネグモ一種太平洋産
キシノウエトタテグモ
スジアカハシリグモ
ミヤグモ
マダラスジハエトリ
外国産ヒメグモ
ハンゲツオスナキグモ
ヒラタグモ ナミザトウムシ
アマミサソリモドキ
ヒヨケムシ

【その他の無脊椎動物】

陸棲：
アフリカマイマイ
団子蟲？実は...
国産タマヤスデ
アカヤスデ
カブトエビ
オカヤドカリ
ムラサキオカヤドカリ
ヤシガニ
ノコギリクワガタ
オカガニ
カブトガニ
南ア産フンコロガシ
アカシマサシガメ
ジュウジナガカメムシ
アカスジキンカメムシ
シロモンオオサシガメ
ヨツボシテントウモドキ
クロイロコウガイビル
オオミスジコウガイビル
クロスジコウガイビル

海水棲：
ゴシキエビ

【脊椎動物門】

爬虫類：
タカチホヘビ一種？
ヒョウモンリクガメ
ホシガメ
パンケーキリクガメ
キタクロコブチズガメ
ジーベンロックナガクビガメ
モエギハコガメ
ホオグロヤモリ
クサガメ
ニホンヒキガエル 魚類：
クマノミ

イソギンチャクカクレエビ
アカツメサンゴヤドカリ
サンゴイソギンチャク
ウミウシ一種
オオクモヒトデ

−飼っているもの・飼っていたもの−【ムセキツイ動物編（クモガタ類以外）】

・クロイロコウガイビル(*Bipalium fuscatum*)

環形動物のヒルではなく、扁形動物の陸棲プラナリア。99 年 3 月、荒川河川敷で木の板の したの芝生上の根の中に、クロイロコウガイビルを数頭発見。三頭採ったはずが、 飼育ケース内で四頭に増えた。で、一頭は頭無しの分裂個体（右）。陸棲貝類 （ナメクジ、カタツムリ） を与えてみたところ、 ナメクジの表面を溶かして吸い取ったり、殻を残して カタツムリの中身を吸い取ったりしている。最大サイズのが分裂前、約5センチ。 そして驚くべきことにこの黒奴は、 粘液の糸を伝わって空中を降下するという離れ業をやってのけるらしい。この異様な謎の生物「Kou-Gai-Biru」をＫＧＢと呼んで、こよなく愛する集団が 実はあった。その名も、「ＫＧＢ友の会」(笑)。衝撃のホームページは、 こちら。みるかし姫もさっそく会員に。

・オオミスジコウガイビル(*Bipalium nobile*)
・クロスジコウガイビル(?)(*Bipalium fuscolineatum*)

さて、続いて同 3 月、有栖川親王記念公園のゴミ箱の裏で採ったのが、世界最大の 陸棲プラナリア、オオミスジコウガイビル（左）。うにょうにょと木の板の裏に丸まって いたが、伸びると体長 35 センチあった。4 センチ程のこぶりなものも採ったが、 こいつにミミズを捕食させると、体の色が山吹色からミミズ色にかわった。

クロスジ(?)は、埼玉県高麗郷巾着田で木の板の裏からとったもの。背面に一本 だけ黒線。（中央、右：上に写っているは、同じ場所に居たコウラナメクジ）

・アカシマサシガメ（上段左）
・ジュウジ(?)ナガカメムシ（上段中：ただし、緑色の個体は、アカスジキンカメムシの生体の死骸）
・アカスジキンカメムシ幼体色（上段右）
・シロモンオオサシガメ（下段左）
・ヨコヅナサシガメ（下段中）
・ヨツボシテントウダマシ（甲虫の一種：下段右）

アカシマとナガカメムシ、テントウダマシは、荒川河川敷にて越冬群集から捕獲（99 年 3 月）。 ヨコヅナサシガメは動物堂から、 アカスジキンカメムシ、シロモンオオサシガメは、カメムシの 寄生蜂を研究しておられる大阪の Yellowtail さんからいただいた。

99 年 3 月末、ナガカメムシが産んだ卵が孵化、明るい赤色の幼体が産まれた。

・カブトガニ（*Tachypleus spp.*）

白い方は、アメリカ産。紫のほうが東南アジア産。パウパウアクアガーデンで購入
5 億年前から姿を変えていない生きた化石。三葉虫をほうふつとさせる体型。おちついていると、ずるずると砂に潜って姿を消すが(左)、泳ぎ出すとすぐひっくり返ってなかなか起き上がれない（中）。脚はやはり、カニかクモ、という風貌。系統的にはクモに最も近い、鋏角類。これらは幼体で甲長 3、4 センチだが、 東南アジア産は成長すると甲長 30cm、尾をいれて 60cm くらいになる。白のほうは、買ったときから鰓に傷があり、長生きせずに死んでしまった。
・南部アフリカ産フンコロガシ（*Telecoprid theper*）

京都のディナシェルトでみつけた大型甲虫。第一脚の太さに注目。
とりあえず餌にコオロギの死骸やドッグフード、リクガメの糞などをやってみた ところ、どれもかじったようです。(^^;

しかし、 このページによると、現地では象の糞、転がしてるとか。 まさか、フンコロガシのために象飼うわけにもいかないし。(笑)

・アフリカマイマイ

香港にて 1997 年 12 月採集。殻の高さ 8 センチの大型。野菜をばりばり食べます。夜な夜な多きな音をたててプラケの蓋をかじったりしています。 後日、日本帰国のため、香港で自然に帰りました。(日本への輸入は、「害獣」 として植物検疫で引っかかる)

・「ラオス産オオダンゴムシ」とおもいきや。。。日本にいるのは脚が 14 脚ですが、こいつは 22 本位ありそう。よく歩き回り、プラスチックの壁もよじ登ろうとする(途中で落ちて丸くなる)。体長 35 ミリ。名前は「ポーリーちゃん」。

脚の数が気になっていたところ、爬虫類クラブで、マダガスカル産の 「メガボール」を見たところ、タマヤスデだと書いてあった。ダンゴムシ は実はエビの仲間の甲殻綱エビ亜綱に属するワラジムシ亜目で、ヤスデ綱とはかなり遠縁。なのに、 こんなに形が似ているなんて。写真は、 マダガスカルタマヤスデ (Glomerida sp.)。 ウチのは、ちょうどこれを小さくしたようなもの(直径 2cm)。 なるほど、ヤスデと比べると、触角がそっくり。ダンゴムシの触角とは違うなあ、 とは思っていたのだが。。。そして、3 ヶ月目にして、ポーリーちゃんは死んでしまいました。土があわないのかなぁ。 みなさん苦労しているようです。

・国産タマヤスデ (Glomerida sp.)
そして、99 年 3 月、 でんぱたんちさんが動物堂から購入された国産 タマヤスデが繁殖したというので、幼体を数匹わけていただきました。さすがに直径 1mm 程と小さく、まだダンゴムシかタマヤスデかマルゴキブリか、はたまた何かの卵 かと言われても区別がつかぬ(右)ほどです。

・オカダンゴムシ
上の二種もあわせて大中小と、だんご体型の蟲がでてきたので、「だんご 3 兄弟」の 替え歌をつくってみました。わらってください。

・ アカヤスデ (*Nedyopus sp.*) 荒川産
都会でもみられる種。

・カブトエビ(*Triops sp.*)

カブトエビ（トリオップス）の飼育セットを買いました(7/22)。なんと、乾燥卵 から水に戻すと三日で孵る、というしろもの。古生代からほとんど体型のかわらぬ、「生きた化石」です。

一回目の孵化には失敗。再度試みて、今度は成功(8/5)。どんどん脱皮して 大きくなり、体長約 1 センチで写真のような姿になってきました。

・・・と喜んでいたら、飼育説明書の指示どおり水草をいれてみた翌日、 二匹が死んで、一匹だけになってしまいました。んー、なんたること。

・・・と水草入りの水をそのまま放置しておいたら、どうやら水草の影に でも卵を産んでいたらしく、数週間後に幼体が孵って泳いでいるではない ですか！？ んー。あなどれぬ、カブトエビ。期せずして、二世誕生 ^_^;;・・・でも、数日後、二世も全滅。ToT

・オカヤドカリ（*Coenobita spp.*）

小田急百貨店のペットコーナーでオカヤドカリを みつけたので、二頭購入しました。図鑑の記述を参考に同定したところ、

ムラサキオカヤドカリ（*Coenobita purpureus*）小笠原諸島、北マリアナ諸島、 鹿児島以南に分布
前甲長 18mm、殻高 9cm 殻径 4cm のアフリカマイマイに入っている

オカヤドカリ（*Coenobita cavipes*）インド-西太平洋域に広く分布
前甲長 16mm、7.5cm x 3.7cm のアフリカマイマイに入っている

ということが分かりました。

珊瑚砂を湿らせてひいて、陶器小皿で「ザリガニ・や どかりのエサ」をやっています。生のジャガイモもやってみたら かじってました。ガラスごしに陽の入る場所で室温（26-29 度） においてあるんですが、そんなもんでよいのでしょうか。

店のおっさんは、「夏場だけのもんですよ。」と愛想の無い説明を してくれました。暖房と、殻の交換が問題、とのこと。よーし。意地 でも来年の夏まで育ててやろうじゃないか。ケージに 20 頭ほどいた ヤドカリたちは、「夏休みの観察」の終わりとともに、見殺しにされ る運命にあるかと思うと、腹が立ってならないので、ついつい二頭 買ってしまいました。店のにいちゃんがいきなり手にのせて、指を はさまれ、5 分ぐらいはさみが離れず、痛い痛いと大騒ぎしてまし た。（ 正しい持ち方はこうです^^）

オカヤドカリの脱皮というのは、上半身をそっくり脱ぎ捨てるので、 ある朝、「うわっ！ヤドカリがちぎれてる!?」と驚かされます。（左） で、よくみると、体がちぎれているとおもったのは脱皮がらで、 貝殻の奥には新しくてまだ白い脱皮したての個体が収まっている というわけです（右）。脱皮がらは複数の個体が争うように食べてしまい ます。カルシウムの再補給なのでしょう。

サザエの殻をケース内にばらまいておいてもなかなか宿替えをしなかったのですが、「やどかり研究所」のオフ会での貝殻交換会(^^;)で、「遊さん」から いただいた葉山産の貝殻をいれたところ一夜で宿替えしてくれました。

・ヤシガニ(*Birgus latro*)
熱帯産の陸上性のヤドカリですが、貝をしょわないことにしたので、 巨大化。ココヤシの実をハサミで切り落として食べるほどの怪力です。→ 「ヤシガニを飼う」のページ

・イソギンチャクカクレエビ(*Periclimenes brevicarpalis*)
海水性の動物の飼育はこれがはじめて。伊豆大島で水深5mのタイドプールに いました。サンゴイソギンチャクのなかにいたんだけど、イソギンチャクごとは もちかえれないので、海岸の海草を持ち帰って「足場」の代理にしてます。ほんとう は、大型イソギンチャクとクマノミと一緒に共生するらしい。

→ ダイビングで見た生き物たちは、こちら。

・サンゴイソギンチャク(*Entacmaea actinostoloides*)・グリーンタイプ
・フロリダ産ウミウシ一種 ・クマノミ(*Amphiprion clarkii*) ・アカツメサンゴヤドカリ(*Calcinus minutus*) ・ロングテンタクル・イソギンチャク(*Macrodactyla doreensis*)

・・・というわけで、30cm 水槽に 2cm のエビ一匹では、なんかさびしいので、 熱帯魚屋に行って、サンゴイソギンチャクのちいさいのを買ってきました。 海水槽の生物って結構難しいんですが、現在いるのは、あと、クマノミと ウミウシ、そして、宮古島産ヤドカリ(下)です。クマノミ(昼)とカクレエビ(夜)が、 交互にちいさなイソギンチャクを使ってます(笑)。

それではあんまりなので、すこし大きいイソギンチャクも入れてやりました。

・ノコギリクワガタ(*Prosopocoilus inclinatus*)伊豆大島産原歯型
伊豆大島の宿舎で明かりに集まってきていました。本州でよく見るやつよりも あごの張りが少なくて色は真っ黒。10月中旬、寿命でしょうか、☆になりました。

・オカガニ（*Cardisoma hirtipes*）甲幅 7.5 センチ、レッグスパン約 25cm

宮古島で、雨が降ると林からのそのそ這い出してくる巨大蟹。甲羅が顔に 似てますよね。「永沢君」と名づけました。 図鑑にでていた個体は、 ハサミがオレンジでとてもきれいですが、こちらは白っぽくて少し地味。 畑などの乾燥したところに棲み、カンダククイガン（芋食い蟹）などと呼ばれて います。孵化時には、集団でゾエアを放出する時刻が、日没後の満潮 1 時間あと とそろっているので、地元ではミチバダルンカン（道端に行列する蟹）とよび、 これを捕って食用にするといいます。

そのほか、持ってかえらなかった（笑） 宮古島の生き物たちは、こちら。

・オオクモヒトデ？（*Ophiarachna incrassata* ?:蛇尾綱アワハダクモヒトデ科）

ついにクモ以外の蜘蛛モノをゲット!（笑）

広尾のパウパウアクアガーデンで購入。飼ってみると実に動きの可笑しいヤツ。 餌を入れると腕をウネウネさせつつ、すーっと寄ってきて器用に腕でつかみ、 口にもっていく。腕長約 5 センチ。

・ゴシキエビ（*Panulirus versicolor*）

体長(目から尾まで)約7センチの若体。脱皮もした。 脱皮がらも立派だ。

飼ってみたい「クモと名の付くクモ以外の動物」

という、 とんでもないコーナーも作りました。

飼育したクモ

・広褄網蛛(Psechrus sp)

香港にて 97 年 11 月 15 日採集。日本にはいない属だが、同属は中国から、東南アジア、オーストラリア に分布（「中国蜘蛛原色図鑑」）。篩板類という粘り気の強い糸をだす仲間。 体長 2.5 センチ、レッグスパン 8 センチという足長おじさん。ドーム状の 大きな巣を張ります。飼育容器の中では、狭くて完全な巣を張れないけれど、 糸にかかったコオロギを捕食しています。

1 月 9 日、卵のうを作りました。触肢で口の前に加えています。採集前に受精 していたとも思えないので、無精卵かと思います。

...と思いきや、2 月 2 日、子グモたちが出てきました（^_^;すでに受精済みだ ったのね）。 70〜80 匹くらい、親の作った巣で、一緒にまどいをしています。 卵のうは一個所でなく、4,5 個所に穴を開けて出てきたようです。

驚かしてくれます。なんと、3 月になり、二度目の産卵。3/23 子グモ 50 匹ほど が出のう。

さらに驚け。二度あることは、三度ある。4 月 6 日、三度目の産卵。11 月に捕獲 して依頼、もちろん、オスとの接触はありません。一回の授精で何回まで、卵 のうづくりするのだろう。

・ジョウゴグモ一種: 触形粒突蛛(Macrothele palpator)?
香港にて 97 年 11 月 15 日採集
レッグスパン 3 センチで漆黒。ガラス管のなかで不規則網を作り、コオロギや ミルワームを捕食します。
98 年 1 月 2 日没。カビのせいか？ 香港の気候は湿潤で、すぐにカビが生えます。

・オオジョロウグモ (*Nephila maculata*) 体長 4.5 センチ、レッグスパン 15 センチ

造網性日本最大種。金色の釣り糸のように強い糸をだす。部屋に放し飼いしたのですが、 体が重くて壁に脚の爪が滑ってかからず、苦労して壁を登ってました。口元に コオロギを持っていくと、そのままくわえて食べます。放して三日後、とうとう、 すでに張っていたジョロウグモの巣を足場に、直径2m近い巨大な巣をはりました。 ジョロウグモは当然ほかへ追いやられてしまいました。^^;

・ アシダカグモ (*Heteropoda venatoria*) 幼体・沖縄宮古産
・~~オニグモ一種~~ コガネグモ一種(*Argiope sp.*)幼体多数・伊豆大島産 (孵化直後のまどい／ ヤシガニケージの中に営巣した幼体)
・ ジョロウグモ (*Nephila clavata*) 東京都荒川区産
・ ナガコガネグモ (*Argiope bruennichii*) 東京都荒川区産
・ゴミグモ (*Cyclosa octotuberculata*) 東京都荒川区産
・ カバキコマチグモ (*Chiracanthium japonicum*) 兵庫県貝塚市産
・ ヤチグモ (*Coelotes sp.*) 横浜市緑区こどもの国産

コガネグモは、伊豆大島で卵のうを採取、孵化させました。ヤシガニケージ内に 巣を張った幼体がよく成長して、ジグザグ模様のかくれおび(コガネグモ属幼体の特徴) のある円網を張っていいます。アシダカグモ若体も、ヤシガニケージに住み着いています。 ナガコガネは、田んぼなどに棲息するクモですが、めずらしく荒川のマンションの周辺の植え込みにい ました。おそらく道路を挟んだ河川敷から移入したのでしょう。

・ナミザトウムシ(*Nelima genufusca*?)八ヶ岳産

・フタコブザトウムシ (*Paraumbogrella pumilio*) 荒川産

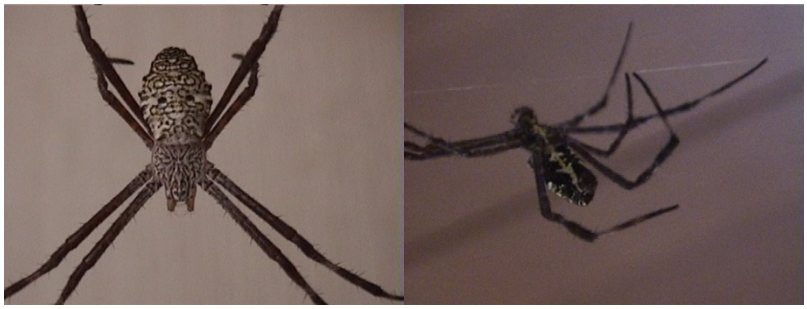
98 年秋、八ヶ岳の水源地にいたので、コケをうえた湿性の水槽にいれて飼ってみ ましたが、すぐに死んでしまいました。 写真はこちら。

荒川の河川敷で 越冬群集から捕えた個体は 3mm 前後ですでに成体 (99 年 3 月)

・ アマミサソリモドキ (*Typopeltis stimpsonii*)

英名 Vinegaroon、威嚇に酢酸を吹きかける、クモガタ類サソリモドキ科の不思議な 蟲（右）。この形は、異形中の異形。^^;;生体オスだったので、ながいきせずに没。

・コガネグモ一種（*Argiope sp.*）太平洋某島産



島の優先種でした。背甲は銀色。腹部背面は、黒・黄・白の模様が恐ろしく細かく 入り組んでおり、腹部下面も綺麗な黄色斑が入る極美種。例によって、部屋に放し飼い で造網させて飼育。よく見ると、生殖口に鍵突起がついており、未受精のメス成体 ということがわかる。

・・・と思っていたら、なんと産卵。数週間後、しっかり仔グモまで生まれて しまった(^^;

・ヒヨケムシ（*SOLIFUGIDAE Gen. sp.*）

エジプトから日本に直輸入で、中野のグリフォンで 8 ヶ月生きた、という個体。 飼育の情報が少なく、いろいろな方法がためされているが、この期間は結構 長いほう。店も「ほんとうは売りたくない」というほど状態の良い個体を、 あえていただいてきてしまった。バスキングライトに体を向けて日光浴をするが、 一定以上条温度があがると日陰に身を隠す（・・・それでヒヨケ虫というわけ）。 夜は 10 度温度を落としている。

ウィンドスコーピオンの異名もとり、砂漠の砂を風に帆をかけたように走る、 という映像をみたことがあるが。。。時々砂を押して遊んでいる他は、じっとしていることが多い。ペットとして知られるうち、もっとも謎なクモガタ 類である。

・キシノウエトタテグモ（*Latouchia typica*）（左）

地中にトンネル巣を作り、入り口に片開きのドアをつける、タランチュラに近縁の 国産クモ。埼玉県天覧山で巣を発見、掘り出したところ、成体メスと 50 頭以上の幼体とが、 深さ数センチの巣に同居していた（2/21 越冬中）。

3 月、皇居北の丸の濠端の道路脇の石の下でも♀成体を捕獲。

・スジアカハシリグモ（*Dolomedes saganus*）幼体(右)

冬(98/2/21)の天覧山で、湿地のススキの根元から多くみつかった。小さいながらも 体型、餌を咥えて走るダイナミックさも、成体と同様。
・ミヤグモ(*Ariadna lateralis*) 成体:樹の皮の裏で越冬中。(天覧山)
・マダラスジハエトリ(*Plexippus annulipedis*) 幼体:樹の皮の裏で越冬中。(天覧山)

・外国産ヒメグモ不明種(右)
・ハンゲツオスナキグモ(*Steatoda cavernicola*) 荒川産
・ヒラタグモ(*Uroctea compactilis*) 荒川産

外国産ヒメグモは、中野の「動物堂」で入荷した動物に紛れて入り込んできたらしい。ヒラタグモはひと昔前は東京でも普通に家の壁に見られたが、最近減って いる。荒川区のマンションの機械小屋の棚状のスキマに多数個体がいた。

飼育したセキツイ動物 八幡明彦

・タカチホヘビ一種(Achalinus rufescens)?
香港にて 1997 年 12 月 22 日採集
青灰色の美しい、全長 1.5 センチの小柄なヘビ。植木ばちのかけらの下に とぐろを巻いて潜っていました。野生下では地中性で、ミミズなどを食べ るとのこと。飼育に成功するかどうかは、今後をご期待。湿った土が好き なようです。
^_^;; 2 月 2 日、脱走しました...。
「香港の爬虫類両生類」を書いたボガデク氏のメールでは、おとなしくて 決して噛まない、ということだったので、「大丈夫^_^;」と家族を納得 させ(ようと、説得し)ていますが。。。ドアの隙間からもう外に出たのか なあ。元気で暮らせよー。

・ヒョウモンリクガメ(*Geochelone pardalis*)
・ホシガメ(*Geochelone elegans*)

・パンケーキリクガメ(*Malacochersus tornieri*)

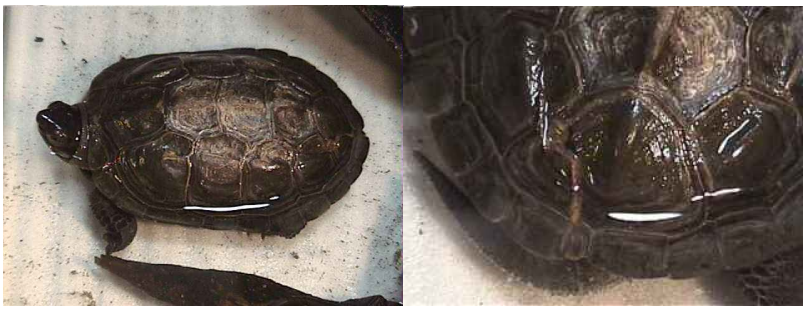
リクガメのページも作りました!

・キタクロコブチズガメ(*Graptemys nigrinoda nigrinoda*)
水棲カメのうちでも、水質にうるさいといわれている川ガメ。北米のミシシッピ州 の一部の川にだけ住んでいる。
・ジーベンロックナガクビガメ(*Chelodina siebenrocki*)
ニューギニア産の首の長ーいカメ。首が甲羅に引っ込まないので、横に 折り曲げる。人に馴れる、ともいうが。。。最後は巨大になる
・モエギハコガメ(Cuora galbinifrons galbinifrons)
飼育は難しい、と言われてきたカメだが。。。
→ ヌマガメ・ハコガメのページもつくりました

・ホオグロヤモリ（*Hemidactylus frenatus*）

奄美以南から東南アジアに産する。電灯ごとになわばりをもっている野生 個体を素手で捕獲（98 年 11 月）。黒っぽい斑紋のあるものもいたが、この個体にはない。 驚いたことに、99 年 3 月になって、産卵した。無精卵かもしれない。ともかく、 湿度をたもって、見守ることにする。

・クサガメ（*Chinemys reevesii*）



甲長 9.4 センチの成体オス。マンションで飼われていて落とされたのか、背腹とも 甲羅に亀裂があり、レントゲンで確認したところ体内でも出血のあとがある。 地域の子どもが保護(?)して 2 ヶ月飼っていたのを、相談にもちこまれたので、 2 ヶ月うちで飼いながら獣医に連れて行き、その後現在、投薬治療を継続しつつ、 小学校の 2 年生クラスで「くろちゃん」という名で飼育されている。同クラスに は、みるかし姫が二時間授業をもらって「飼育の心得」を聞いていただいた。

・ニホンヒキガエル

98 年 3 月、土壌動物採集中に土の中から這い出してきた、まだ体長 23 ミリ前後の小さな個体。